



Newspaper in Education



教育に新聞を

実践報告書

2022年度



はじめに ～うらづけとゆさぶり～

静岡県NIE推進協議会
会長 安倍 徹

本年度の実践報告会では、実践指定校8校の教育実践が報告されました。本報告書に収められていますように、教育活動が制限される中でも、創意工夫に満ちた取り組みを展開していただき、まずもって、関係校の教職員の皆様に敬意を表し、感謝を申し上げます。

私自身、1年間を振り返ってみますと、全国大会や実践発表会、実践報告会などに参加し、新たな気付きや再認識させられることがいくつかありました。その中のひとつに、「うらづけとゆさぶり」がありました。

中学校理科の気象分野で、季節に特徴的な気圧配置と天気との関係を学習する研究授業を参観しました。教科書に沿って学習した後、実際の気圧配置と天気との関係を新聞記事に掲載されている天気図と天気予報で確かめるという展開でした。その結果は、教科書で学習した内容とほぼ一致しており、教科書で一般的に述べられている内容が実際の具体的な身近な事象にも適用できるという、言ってみれば、新聞の情報が学習内容の「うらづけ」の役割を果たしていました。

しかしながら、「ほぼ一致」と前述したのは、提示された新聞記事の資料を注意深く見ると、ほとんどの地域が好天予想だった中で、1カ所だけ天気が悪いという予報が出ている地域があったからです。授業では、そのことについて特に触れませんでした（次の授業で扱ったのかもしれませんが）、授業を受けている生徒の中には、「なぜだろう」「どうしてだろう」と疑問を抱いた生徒もいたのではないかと思います。まさに、新聞の情報が「うらづけ」に加えて「ゆさぶり」の役割も果たしていたのです。なぜ1カ所だけ天気が悪いのか、どこかで発生した雲がその地域にたまたまかかっていくからだろうか、あるいは地形的に雲が生じやすい場所であるからだろうかなど、その理由はいくつかあり複合的なものかもしれませんが、学習内容と予報との間に生じた「ずれ」を活用して、生徒に「ゆさぶり」をかけることは、学びを深くし発展させる一つの方法ではないかと思えます。

このように、新聞に掲載された情報を、学習内容の「うらづけ」に、時には「ゆさぶり」にも使っていただければと願っています。

本報告書には、様々な視点からの授業実践が紹介されており、各学校がそれぞれの実情を踏まえた教育活動を進められていくに当たり、参考となる取り組みがたくさん盛り込まれているものと思います。活用していただければ幸いです。

むすびに、本報告書の作成に当たり、御理解・御協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

目 次

- ◆「言語能力を高めるための新聞の活用」
河津町立南小学校 土屋 晃子…………… 3

- ◆『新聞に親しみ、考えを広げるNIE』
静岡市立中島小学校 伊東 一磨…………… 7

- ◆情報活用能力の向上につながる新聞の可能性
牧之原市立萩間小学校 絹村 雅昭……………13

- ◆関わりを通して、NIEで学びを広げよう
浜松市立上島小学校 笠原 吏沙……………16

- ◆自分を取り巻く社会へ目を向け、自分の視野を広げる
静岡大成中学校 片井 奈美……………21

- ◆NIEで身近な社会を！
浜松学芸中学校 大場 裕幸……………25

- ◆生徒の手に新聞を — 新聞活用の実践と挑戦 —
静岡県立御殿場南高等学校 芹澤 光……………30

- ◆NIEの活用による思考力・判断力・表現力の向上
静岡県立藤枝東高等学校 深澤 拓・矢代 哲子……………36

「言語能力を高めるための新聞の活用」

河津町立南小学校 土屋 晃子

1. はじめに

本校では、子供の言語能力を高めるために、新聞をどのように活用できるかについて、学校全体で取り組んできた。まずは、全校の児童が新聞に親しめるようにしたいと考え、研修を進めた。国語を中心に、それ以外の教科でもできることを模索しながら、授業で活用してきた。また、発達段階に応じて、朝の会のスピーチや委員会活動などにも取り入れるようにした。



2. 実践内容

(1) 書く活動

ア 2年国語「伝えたいことを五・七・五で表そう」

新聞の写真を使って、かるたを作成した。まずは、新聞から気になった写真を選び、これを絵札とした。次に、見出しや記事の内容からわかったこと、写真から感じたことを付箋に書き出した。そして、絵札を紹介する言葉を五・七・五のリズムで表現した。

記事：猫に飼い主の声を聞かせ反応するか実験した



学習を進めていくうちに、似たような絵札を示すと、「どのカルタのことを示しているのかわからない」という課題が出てきた。そこで、絵札のことを端的に表現する言葉を選ぶ活動が必要になった。子供たちは、「かわいい」「白い」だけでなく、様子を具体的に表す言葉を使って、写真の様子を表現できるようになった。

カルタ大会を単元のゴールとすることで、より適切で具体的な言葉を選ぶために、写真だけでなく、見出しや記事を読む必然性が生まれた。また、絵札にぴったりの言葉を選ぶために、様々な言葉を読み比べ言葉を選び直す活動を通して、言語表現が豊かになった。

イ 6年国語「書き方の工夫を見つけよう」

新聞の投書記事の内容から意見文の構成や展開を考え、それらを参考にしながら自分の意見文を書く活動を行った。新聞の投書記事に対して、自分の意見文を書く活動を週末の課題として継続したことで、「筆者の考え」「それに対する自分の意見」「なぜそう思ったか」の3段落を意識して書けるようになった。



(2) 読む活動

ア 5年国語「報道文を読み、考えを深めよう」

教科書教材から新聞記事の構成を理解し、2つの記事を読み比べた後、実際の新聞を読み比べる学習を行った。

まずは、静岡新聞の1面の記事を読み、事故の概要を把握した。次に、同じ日の新聞の総合面と社会面、それぞれの記事を読み比べた。記事から情報を読み取り、書き表し方の工夫を出し合った。

その後、同一の事件や事故の内容が、1日の新聞になぜ複数掲載されているのかについて話し合った。子供たちは話し合いから、「専門家や被害者など、様々な立場の人の意見を知れるので、多角的に考えることができる」「読めない字があっても、写真、表、グラフがあるとわかりやすい」などの新聞の持つ良さや工夫に気付いていった。一方、文字を読むことに抵抗があり、テレビやインターネットの方が手軽に情報を得られるという子供もいた。



静岡新聞1面



A 静岡3面(総合)

B 静岡21面(社会)

イ 特別支援学級国語「新聞クイズを作ろう」

まずは、教師が作った新聞クイズに挑戦した。名前を問うクイズ、場所や数を問うクイズを示し、何を答える問題にするのか例示した。次に、実際に新聞を読み、気になった記事からクイズを作る活動を行った。名前、場所、数、何を問うものにするのか、できた問題は新聞の内容に合っているのか、考えながら取り組んだ。



車が大好きな児童は、名車デロリアンの記事を選び、新聞を読めばわかる3つのクイズを作った。作った問題を廊下に掲示することで、交流学年を中心に、挑戦する児童の姿をたくさん見ることができた。

この実践では、新聞からクイズを作ることで、新聞への関心の高まりが見られた。また、作る側も答える側も楽しみながら内容を読めるので、特別支援学級と他の学級の児童の交流につながった。

ウ 1年国語「ひらがなをみつけよう」

学習した文字を新聞から探し出して印をつけ、見つけた文字を言葉にしていった。文字探しをする中で、文字の大きさが違うことや写真があることなど、新聞の構造について自然に着目していく様子が見られた。



エ 3年国語「しょうかいしよう、わたしのお気に入り」

新聞から自分の気に入った写真を選び、「それが何の写真なのか」「なぜその写真を選んだのか」について、聞き手に分かるように工夫して話した。

新聞を読む中で子供から「分からない単語があったときどうしたらよいのか」という問いが生まれ、国語辞典の学習につなげることができた。



イ 1年生活「あきしんぶんをつくろう」

1年生では、新聞から秋を感じる記事や写真を選び、自分なりに再構築していった。見つけた秋の写真を画用紙に貼ったあと、写真から気づいたことなどを記事のように付箋で貼って新聞を完成させた。



(3) 国語以外の教科での活用

ア 2年生活「冬をみつけよう」

まず、冬を感じる写真を新聞から見つける活動を行った。みかんの写真を見つけた子供が、新聞の見出しや記事から、年中見られるみかんが冬の食べ物だったことに気付くなど、季節感を育む活動となった。次に、選んだ写真について、一人一人が、調べたことや考えたことを冬新聞にまとめていった。



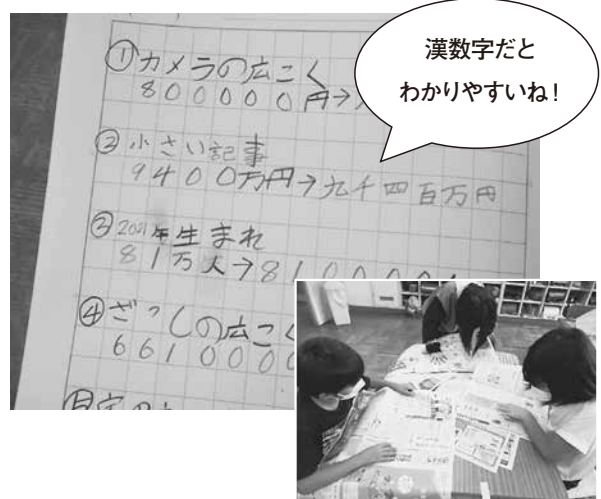
作成した冬新聞を互いに紹介し合ったあと、それぞれが調べたことを確かめるために実際に外に出て、冬探しを行った。その後、校庭や運動場の周りの植物、畑に育っている野菜などの名前をグループで調べ、「学校で見つけた冬」の新聞を作った。

実践を通して、写真から興味を広げ、見出しや記事の内容を読もうとする姿が多く見られた。また、1年を通して見られるものが、この季節の旬のものだということが分かった。

実践を通して、写真から興味を広げ、見出しや記事の内容を読もうとする姿が多く見られた。また、1年を通して見られるものが、この季節の旬のものだということが分かった。

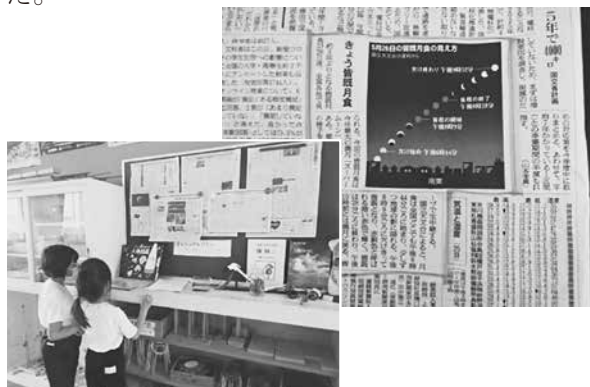
ウ 3年算数「大きな数」

新聞記事や広告の中から、一万よりも大きな数を探し出し、その数字を読んだり書いたりした。「数字のみ」で書き表す場合と、「漢数字」を使う場合があることに気づき、それぞれの書き表し方の効果について考える学習にもつなげることができた。



エ 4年理科「月の満ち欠け」

新聞に掲載されている月の満ち欠けの情報を紹介合った。その日の新聞を活用することで、リアルタイムで月の満ち欠けを考えることができた。また、これをきっかけに家で月を観察した児童もいて、天体に対して関心を広げることができた。



オ 3年社会「くらしを守る」

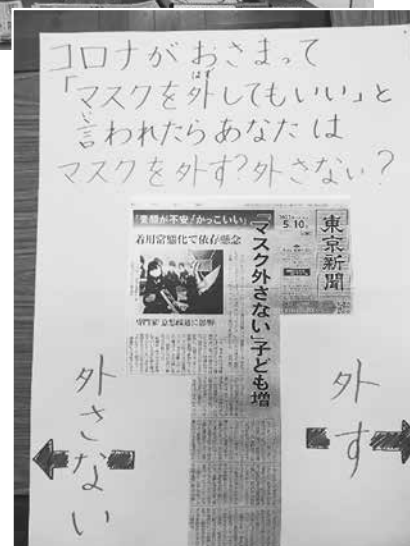
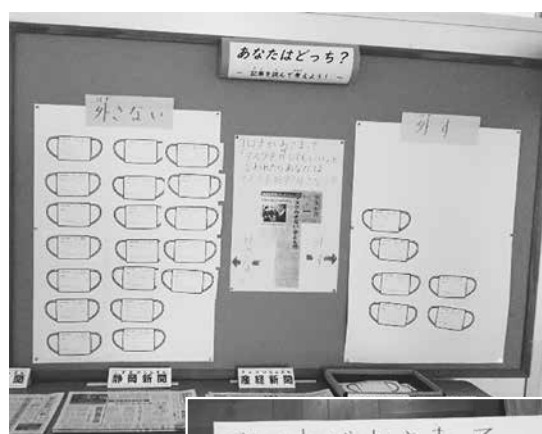
新聞を見て、毎日様々な事件や事故、災害が日本各地で起きていることを知り、自分たちの安全な暮らしを支える仕組みや、人々の働きに関心を持つことにつながった。想像した以上に、記事が見つかったことで、日本では日々様々な事件や事故、災害が起きていることを理解することができた。また、人々の安全を守る仕事や活動の必要性に気付くことができた。



(4) 特別活動での活用

ア 保健委員会の取り組み

委員会活動でも新聞記事から活動を広げることができた。保健委員会では、「コロナがおさまっても、マスクを外さないと答える子どもが増えていく」という記事から、「自分だったらどうするか」という問題提起する掲示板を作成した。新聞記事の内容を自分ごととしてとらえ、全校児童が意見や考えを交流する場となった。



3. まとめ

(1) 成果

- ・ 普段新聞に触れていない児童が様々な活動によって新聞に触れることで、新聞に親しむことができた。
- ・ 授業者が、子供に資質能力を育てるために、授業の中で新聞をどのように活用したら良いかを考えることを通して、教材研究の面白さを実感できた。
- ・ 授業づくりの手立ての一つとして、新聞を使うことの有用性を実感できた。今後の授業づくりに生かせるものとなった。

(2) 課題

- ・ 漢字や語彙が難しく、学年によっては新聞を読むこと自体に多くの支援が必要だった。
- ・ 教科によっては、新聞を使うこと自体が目的になってしまうことが多かった。普段から教師が新聞に親しみ、子供を育成するための授業づくりの「手段」としての活用を意識したい。

『新聞に親しみ、考えを広げるNIE』

静岡市立中島小学校 伊東 一磨

はじめに

(1) テーマ設定の理由

本校は、静岡市駿河区の大浜海岸近くにある、全校児童400人余りの中規模校である。海に近いという土地柄、地震や津波に対する防災意識が高く、地域全体で防災訓練に取り組んでいる。子供たちも低学年時からの防災教育を通して、地震や津波への関心が強く、防災への意識が高い。

本校は令和3年度からNIE研究実践指定校になり、子供たちが多くの新聞に触れることができる環境ができた。新聞には、「いつでも読み返すことができる」、「信頼性が高い」、「地域に密着している」など、他のメディアにない良さがある。一方で、新聞に対して「読むのが難しい」「つまらない」など、抵抗感を持っている児童も多い。新聞を購読していない家庭も多く、新聞に親しんできている子が少ない現状がある。まずは、実践指定校としての恵まれた新聞学習環境を生かして、さまざまな実践を通して新聞に親しむことが大切であると考えた。その上で、子供たちの中で関心の高い防災や、オリンピック、サッカーW杯などの大きな出来事を切り口に、授業や日常の出来事と新聞をマッチングしていくことで、子供たちが身の回りの出来事に興味・関心をもち、自分なりの考えを広げていくことができるようになるのではないかと考え、標記の通りテーマを設定した。

2. 実践内容

(1) 校内研修にNIEを位置づけた

令和3、4年度ともに、NIEを校内研修の柱の一つとして位置づけ、NIE部を組織した。年度当初にNIEのガイダンスを開き、どのように実践を進めていくのか方針を確認し、各学年の目標を設定した。さらに令和2年度末に作成した年間指導計画において、NIEと関連付けて新聞活用ができそうな単元を学年部ごと拾い上げた。その後NIE部を中心に授業実践を重ね、前後期1回ずつ、全体研修の場でNIEの実践報告会を行った。そこでは、各学年の実践の成果と課題を共有するとともに、よりよい実践に向けて話し合う場を設けた。また、下記のようにNIEの3分野について共通理解を図った後、各学年の目標を決め、取り組んでいくこととした。

また、週2回15分間の「新聞タイム」を日課に導入し、静岡新聞社や自作のワークシートなどに取り組んだ。

<NIEの3分野及び各学年の目標>

新聞制作学習（新聞に学ぶ）	新聞活用学習（新聞で学ぶ）	新聞機能学習（新聞を学ぶ）
○学習のまとめや表現方法の一つとして新聞にまとめる活動。 ・情報収集、整理、加工、編集、文章要約、レイアウト、見出し、リード文。 ・国語力と関連付けて指導する。	○補助教材として新聞を活用する。 ・記事、写真、見出し、広告、図、グラフ、漫画など。 ・新聞ならではのタイムリーな情報を学習に役立てることができる。	○新聞社や記者をGTとして招き、仕事や新聞発行までの過程、紙面の作り方について学ぶ。 ・情報モラルや個人情報、知的財産権、情報の信ぴょう性なども学ぶ。
低 学 年	中 学 年	高 学 年
『新聞と仲良しになろう』 ◎新聞に親しませることが大切 →「新聞って楽しい、おもしろい」 ・新聞を使って遊ぶ ・写真や見出し、広告、漫画等を生かした活動 ・1年前期は文字の読み書きが難しかったため、その他の活動が必須	『新聞を知ろう、学ぼう』 ◎新聞について幅を広げる ・記事の内容を読む・新聞を作る ・静岡新聞社が毎週日曜刊行している「YOMOっとしずおか」活用 ・子ども新聞を活用する ・「新聞ワークシート」を使って、記事を読み取る学習に取り組む	『新聞を活用しよう』 ◎今までの活動を生かし、「新聞を活用する」ことに重点を置く ・3、4年生の活動+ a →新聞の読み比べ →記事についての自分の考えを書く →新聞に投書するなど

参考：『いつでも・だれでも・どこでもNIE』土屋武志 監修 碧南市立西端小学校 著

(2) 新聞学習環境の整備

司書教諭及び学校司書と連携し、新聞に関わるセンター的機能を学校図書館に集中させ、図書委員会とタイアップした。これにより、新聞の配架及びバックナンバーの管理、新聞を活用した掲示物の掲示などを整理し、より使いやすい環境を整えることができた。

図書館と連携したことで、読書活動と併せて新聞を読むことに親しませるきっかけになったり、記事をもとに特設コーナーを設置して読書活動の推進にもつなげたりと、相乗効果が見られた。

また令和4年度途中からは、中日新聞社静岡中日サービスの曾我様、福田様のご厚意により、NIEコーナーの飾りつけや低学年学級への「中日こども WEEKLY」配架などのご協力を得ることができた。これにより、子供たちがより新聞コーナーに親しみをもち、足を止めたり、新聞を手にとったりする姿が見られることが増えた。現在もNIE担当と福田様が定期的話し合いの場をもち、他校のNIE実践について情報交換するなど、交流が続いている。今後も協力関係を続けていき、NIEのアドバイスを頂きたいと考えている。新聞社・販売店とのつながりを構築できたことは、本校のNIE実践の活性化の一助になった。



(3) 職員室・印刷室の環境整備

NIE関連資料を職員室に配置し、教職員が気軽に手にとって見られる環境を整備した。また、教育や子ども、働くことに関する記事や、季節的なものを掲示したり回覧したりすることで、より多くの教員が日常的に新聞に触れ、NIEを楽しんで取り組みを進めてもらえるようにした。印刷室には、静岡新聞社のワークシートやさまざまな新聞に関するワークシートを用意し、自由に印刷して使えるように配置した。



②令和3年度5年生の取り組み

・「新聞読み方教室」(NIE出前講座)の実施(令和3年度 5年生・社会科)

静岡新聞社の吉本寿様を講師としてお招きし、新聞の読み方教室を実施した。新聞の構成や新聞ができるまでの流れ、見出しやリード文の役割など新聞について詳しく学び、夢中になって新聞をめくっていた。身の回りのことに興味を持たせ、子供たちの視野を広げることにつながった。



・静岡新聞社「ひろば10代」への投稿(令和3年度 5年生・国語科)

国語科「あなたはこう考える～読み手が納得する意見文を書こう～」の単元で、静岡新聞社の「ひろば10代」へ投稿することを目当てに設定し、意見文を書く活動を行った。まず掲載されている意見文を読んで自分の感想を持ち、交流するところから始めた。次に、自分の興味があることや今頑張っていること、悩んでいることや気になったニュースなどを書き出し、題材設定を行った。題材を決めたら、読む人が納得するように「自分の主張」、「理由」、「根拠」などを示し、「初め・中・終わり」の構成で書くように指導した。5年生全員の意見文を投稿したところ、令和4年3月～4月にかけて4人の意見文が掲載された。

<p>卓球水谷さん僕のヒーロー 静岡市駿河区 (小学生 11歳) 卓球の水谷さんが現役を引退したのは悲しかった。東京五輪混合ダブルスは金メダル、男団では銅メダルだった。引退後、もうテレビでは見られないのかなと思う。エミー番組のゲストやゲームのCMにも出てほしいと思った。水谷さんは僕のヒーローだ。だから、早くもテレビで活躍してほしい。</p>	<p>空を飛ぶ気持ち味わいたい 静岡市駿河区 (小学生 11歳) 鳥空を自由に飛んでいる時、私も空を飛んでみたい。翼を思い描き、空を飛ぶ。空を飛ぶと、心も落ちつく。何かを思い描くと、心も落ちつく。何かを思い描くと、心も落ちつく。何かを思い描くと、心も落ちつく。</p>	<p>パソコンの使い方注意必要 静岡市駿河区 (小学生 11歳) ゲームは大好き。でも、1年生から使ったパソコンは、5年生から使ったパソコンとは違う。ゲームは大好き。でも、1年生から使ったパソコンは、5年生から使ったパソコンとは違う。</p>	<p>フィルムカメラ 楽しい作業 静岡市駿河区 (小学生 11歳) 私は最近、カメラで写真を撮るのが好きになった。フィルムカメラは、デジタルカメラとは違って、シャッターを押す瞬間、音がする。その音が、とても楽しい。</p>
--	---	--	--

③「実践のまとめ」を通しての各学年の実践紹介

右のような形式で実践のまとめを作り、各学年で共有した。どの学年でも各教科と関連させ、バラエティーに富んだ様々な実践をすることができた。

新聞を読むことが難しい低学年においても、各教科と関連付けて実施し、新聞に親しませることができた。

高学年においては、記事を読んで要約したり、感想を持ったりする活動を行い、学習用端末を活用した実践も見られ、NIEの新たな可能性を感じた。

1年生

＜新聞を活用した授業実践の概要＞

学年・教科(3分野)	単元名	主に使用した新聞
1年・(2)	お気に入りの記事を見つけてよう。	静岡新聞

＜学習目標＞(観点)

- ① オリンピックの新聞記事から、お気に入りの写真を見つけることができる。(主体的に取り組み態度)
- ② 写真を適当に話をすることができる。(思考・判断・表現)

＜学習の流れ＞

- ① 新聞から抜粋したオリンピックの記事を2人に1枚ずつ配る。
- ② 自分の気に入った写真を見つける。
- ③ なぜ、その写真が気に入ったかわけを考える。
- ④ 気に入った写真と、そのわけを友達に紹介する。

＜成果②と課題②＞

- ② 記事に、子供たちが考えた理由を記入し、掲示することで、新聞に興味をもつきっかけとなった。
- 自分達では読めない内容が多いため、記事の内容については、教師の解説が必要となる。
- 文字が多くて嫌になってしまう子がいるため、写真を使って興味を引き付ける必要がある。



2年生

＜新聞を活用した授業実践の概要＞

学年・教科(3分野)	単元名	主に使用した新聞
2年・国語(その他)	ちぎった形で作ろう～ズミの世界～	朝日・静岡

＜学習目標＞(観点)

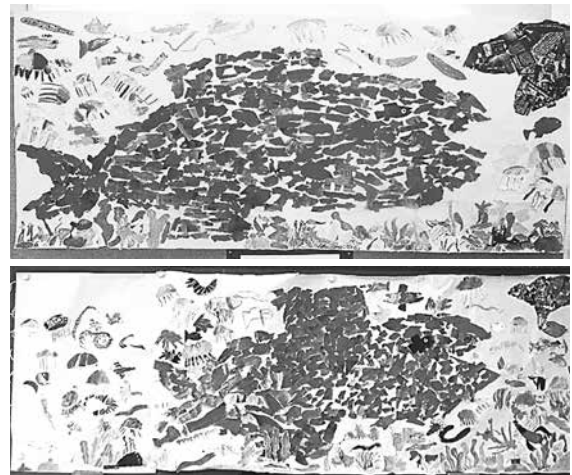
- ① ちぎった紙を組み合わせ、大きな魚に見立てて作ることができる(知識・技能)
- ② 紙を破く楽しさや破いた紙の見方や組み合わせを工夫してちぎり絵で表す楽しさを味わうことができる(主体的)

＜学習の流れ＞

- ① 新聞紙にいろんなトーンの赤で塗ってみよう。
- ② 赤い新聞紙を魚の形にちぎってみよう。
- ③ 海の底でズミーが出会った「おもしろいもの」を描こう。

＜成果②と課題②＞

- ② 国語の学習と関連付け、思い入れの強い作品を意欲的にちぎり絵で表すことができた。
- マグロのしっぽを、色を塗らずに紙面上の黒っぽい部分だけで作ることで、新聞の色を生かした作品になった。
- 片づけに時間がかかる。
- スズミーの色も記事の中の赤で作ったかったが、探している時間がかかるため、色づくりと兼ねた。



3年生

＜新聞を活用した授業実践の概要＞

学年・教科(3分野)	単元名	主に使用した新聞
3年・道徳(新聞で学ぶ)	自分らしさをのぼすために	静岡新聞

＜学習目標＞(観点)

- ③ パラリンピック水泳山田 美幸さんの新聞記事を通して、自分らしさを見つけようとすることができる。
- ④ 自分らしさをのぼすことについて考えることができる。

＜学習の流れ＞

- ① 自分らしさを見つける(好きなこと、とくいなこと、苦手なこと、がんばりたいこと)
- ② パラリンピック水泳山田 美幸さんの映像をみる。
- ③ パラリンピック水泳山田 美幸さんの新聞記事を読む。
- ④ パラリンピック水泳山田 美幸さんの映像や新聞記事から自分らしさをのぼすため、どんなことができるか考える。(ワークシート)

＜成果②と課題②＞

- ② 今、現在開催している、タイムリーな話題だったので、子ども達も興味関心があり、真剣に考えていた。また、美幸さんも14歳と歳が近く、自分と比べて考えることができた。
- ④ 自分らしさ=好きなこと、得意と考えがちだが、苦手なこと、がんばりたいことなども自分らしさであること、努力し、伸ばしていけることを考えることができた。
- 具体的にどう努力するのか、どうがんばるのかまで考えさせたかった。



4年生

＜新聞を活用した授業実践の概要＞

学年・教科(3分野)	単元名	主に使用した新聞
4年・国語(2)	新聞を作るう。	静岡新聞
4年・社会(2)	わたしたちの県のまちづくり。	静岡新聞

＜学習目標＞(観点)

- ③ 見出しや写真などから、気になる記事を見つけることができる。(知・技)
- ④ 新聞記事の内容を大まかにまとめることができる。(思・判・表)

＜学習の流れ＞

- ① 新聞を見ながら、興味のある記事を探す。
- ② 記事の内容を読む。
- ③ 内容を短い文でまとめる。
- ④ まとめた文を話す。

＜成果②と課題②＞

- ③ たくさんの記事の中から、大きな見出しや目を引く写真に注目し、記事に興味を持つことができた。
- ④ 新聞記事に興味を持って読むことができた。
- ④ 記事の内容を自分なりの言葉でまとめ伝えることができるようになってきた。
- ④ 記事を画面や切り抜きで残すことで、共有したり確認したりして、身近に扱えるようになった。
- ④ 友達がまとめた記事に対して、自分の感想や意見を述べるようになった。
- ④ 社会で学習したことが、記事になっていることを実感するなど、身近な地域とのつながりを意識するようになってきた。
- ルビがない新聞だと、読めない漢字があり、全文を読むのに時間がかかった。



5年生

＜新聞を活用した授業実践の概要＞

学年・教科（3分野）	単元名	主に使用した新聞
5年・社会（①）	自動車づくり（工業）	静岡新聞

＜学習目標＞（観点）

◎自動車づくりや自動車に関する記事を読み抜き、気付いたことや感想を書くことを通して、学習事項と実際の自動車産業を結びつけ、考えを深めることができる（思・判・表）

＜学習の流れ＞

・自動車産業について学習した後、生産・技術・EV・環境・事故防止・福祉など、さまざまな視点で記事を探して切り抜き、付箋にコメントを書いて交流し、模造紙に貼りつけて掲示した。

＜成果◎と課題◎＞

- ◎活動の結果、下のような表が見え、教科書で学んだことを生かすつ、さらに現実的な視点で自動車づくりへの理解を深めることができた。
- ・メーカーは、顧客のニーズに応え、様々な技術や機能を盛り込んだ新型車を開発していること。
- ・現在の経済の状況が影響して減産に転じていること。
- ・環境保護の流れが世界的に進み、EVが注目されていること。
- ・最新技術の開発が進み、安心・安全機能がさらに充実してきたこと。
- ・コロナと自動車のかかわりを見出し、自動車をオフィスとすることなどさまざまな商機が生まれていること。
- 上のような理解には個人差があり、ただ車の写真を探しているだけの子どもがいるため、内容にも着目させ、授業内容との関連づけを図りたい。



6年生

＜新聞を活用した授業実践の概要＞

学年・教科（3分野）	単元名	主に使用した新聞
6年（②）	気になる記事を読み取る。	朝日新聞

＜学習目標＞（観点）

- ◎自分が興味のある新聞記事を見つけ要約、感想を書くことができる。（知・技）
- ◎友達と要約、感想で工夫されていることを見つけ交流することができる。（思う・判・表）

＜学習の流れ＞

- ①新聞を読む。
- ②自分の興味のある記事を読み取りワークシートに貼る（新聞スクラップ）
- ③記事について要約、感想を書く。
- ④書いた要約、感想について交流し感想を伝え合う。

＜成果◎と課題◎＞

- ◎新聞記事を読むことに興味をもち進んで自主で取り組む児童が見られた。
- ◎新聞を読む、新聞スクラップ、要約、感想、交流という活動を継続して続けることで要約、感想の内容が分かり易く詳しい文章が書けるようになった。
- 新聞を取っている家庭、取っていない家庭で意欲に差があった。
- 記事や写真などから正確な情報を読み取れない子がいた。



3. 成果と課題

(1) 成果

○「新聞に親しむ子が増えた」

今まであまり新聞に親しんでこなかった子たちが、実践指定校の豊かな新聞環境を生かして新聞とかかわる機会を得たことで、新聞を読むことや活用することの楽しさを味わい、身近な情報ツールとして再認識するようになった。メディアとしての新聞の良さに気づき、新聞に興味を持つ子が増えた。

○「記事から必要な情報を短時間で取り出す力が付いた」

特に高学年で、記事を要約したり、感想をもって交流したりする活動を通して、新聞記事を読む力が付いてきた。国語科や社会科において、文章やデータなどの読解力や、自分の考えをまとめる力が高まった。

○「各教科に関連付けて多様な実践ができた」

国語科・社会科・理科・算数科・生活科・図工科・総合的な学習の時間など、多くの教科の特性を生かし、子供の興味関心や発達段階に応じて創意工夫を凝らしたNIE実践を展開することができた。

(2) 課題

●「NIEタイムでの活動が単発的になってしまった」

15分間ではできることが限られ、ワークシートなどは用意していたが、系統的に年間通して積み上げていくことが難しかった。令和4年12月に実施した児童アンケートの中で、「NIEタイムの新聞の学習は自分のためになる」という質問において「よくあてはまる・だいたいあてはまる」と回答したのは約65%に留まった。

●「新聞記事を読むのが難しい子が多く、支援や教材化が難しい」

読めない漢字や難解な言葉も多く、正確に内容を理解するには低・中学年において難しかった。

(3) おわりに

2年間実践指定校として様々な実践を重ね、新聞を子供たちの力の育成に役立てることができた。「実践のまとめ」をはじめとしたNIEのノウハウは確実に引き継ぎ、今後も本校の財産として有効活用していきたい。

情報活用能力の向上につながる新聞の可能性

牧之原市立萩間小学校 絹村 雅昭

1. 1年目の取組

本校に赴任した昨年度「NIE実践校」の指定を受け、担当となったが、正直、不安が先に立った。

小学生を対象としての新聞を活用した活動を想像した時、「難しい語句があって読み取りは難しいのではないか」「そもそも習っていない漢字が多く、教材として適さないのではないか」と考えたからである。そのため、先生方には「新聞を使った授業や活動を、何かやってください」程度の投げかけしかできず、研究テーマすら提示できないままのスタートであった。しかし、先生方は国語をはじめとして様々な教科で挑戦し、それを1年目の実践記録集としてまとめることができた。

2. 2年目の取組

2年目を迎えた本年度は、さらに実践を重ねつつ、それらを体系的に整理しようと考えた。

そこで着目したのが学習指導要領の中の「情報活用能力」である。

6年生の時点で「情報活用能力」の高まった子供の姿をイメージして、これまでの実践を1年生から段階的に捉えなおした。

その中でわかってきたのは、本校の実践を「情報活用能力」という視点で見た時、その狙いや成果から、活動を次の三つの段階に分けることができるということである。

(1) 新聞に親しむ段階

(2) 新聞から情報を得る段階

(3) 新聞から得た情報を活用する段階

(1) 新聞に親しむ段階

◎ 「こども新聞コーナー」の設置

子供たちができるだけ新聞を読んだり触れたりできるように動線を考えて全部で3か所に置いた。

◎ 2年生図工「新聞となかよし」

新聞を材料にして製作活動を行った。



「大量の紙を大胆に裂く」という普段あまり経験のない行動に、子供たちは興奮し、夢中になっていった。細長く切ったものを体に巻き付けたり、細かくちぎったものをつなぎ合わせたりしながらイメージした世界に入り込んだ。新聞の手触り、破れる音、インクの香りは楽しい記憶として子供たちの心に刻まれたことであろう。

(2) 新聞から情報を得る段階

この段階は各学年とも様々な情報を見つけたり読み取ったりしながら、実に多彩な活動が開かれた。

◎ 特別支援学級 国語

「パラリンピックの写真を選ぼう」

パラリンピックの閉会式を一面で取り上げた新聞を6紙用意し、その写真を並べて提示した。「どの写真が一番気に入ったか」という問いに対して、「いろいろな色があってきれいだからこれ」「大勢の人が楽しそうに笑っ

ているからこれかな」など、普段は意見を言うのが苦手な子供からも様々な観点からの発言があった。写真が訴えかける魅力が思いを喚起した瞬間であった。さらにそれらの写真を4年生国語の説明文、「アップとルーズ」の発展教材として使うことで、語句とイメージを確かに結び付けることができた。



- ◎ その他の言葉、数字探しの実践
 - 1年生 国語「うみのかくれんぼ」における「動物の名前さがし」
 - 2年生 国語「カタカナ語さがし」
 - 3年生 算数「大きい数」における「1万より大きい数さがし」

- ◎ 4年生 国語
 - 「自分の新聞を作ろう」
 - お手本として「こども新聞」にたくさん目を通し、「どのような内容を面白いと感じるか」という感性を磨き、取材の参考にした。見出しやリード文、段組など、構成の参考として活用することで、読みやすい新聞が完成した。

(3) 新聞から得た情報を活用する段階

学習指導要領によれば、この段階では、得た情報をもとに表現したり、発信したりすることが求められる。しかも、それらは「受け手の状況を踏まえること」が望ましいと記されている。これらの狙いを楽しく主体的に達成することを意図して高学年では次のような授業を行った。

- ◎ 5年生 国語
 - 「4コマ漫画を使って想像力を養おう」

4コマ目のせりふを隠して提示し、どのような言葉かを想像させたり、5コマ目があったらどんな絵になるだろう?と投げかけたりした。



子供たちは自分とは異なる多様な答えが出てきたことに驚くとともに、それぞれの考えに根拠があることに気づいた。そこから着眼点や発想を変えて表現することに楽しさを見いだしていった。

- ◎ 6年生 国語
 - 「新聞記事からクイズを作って解こう」
 - 得た情報を活用すること、それを送受信することを狙って子供が大好きな「クイズ」を取り入れることにした。手順は以下の通りである。



- ① 2人一組のペアを作り、それぞれ異なる「こども新聞」を読む。
- ② そこに書かれている情報についてペアで相談してクイズを3問作成する。1問目は知っていれば簡単に答えられるレベル、3問目は情報元の新聞をじっくり解釈しなければ解けないような難問にするよう指示する。
- ③ 全部のペアがクイズを作成できたところで、回収した問題用紙をシャッフルして配布し、他のペアが作ったクイズに挑戦させる。
- ④ 各ペアがクイズ作成に使用した「こども

新聞」はすべて床に並べて置き、答えを探し当てるのに使ってよいこととする。



クイズを解こうとして情報元の新聞を熱心に探し求め、目的の記事が見つかるに黙々と読み込む子供の姿が見られた。

3. 活動の成果

この活動により、これまで情報の受け手でしかなかった子供たちがクイズを作って伝える発信側となることができた。クイズの難易度をどのくらいに設定するか段階では「受け手の力を助成する」という意識を働かせることにもつながった。さらに「受け取ったクイズを解きたい」という必要感から主体的に情報を探すという体験ができ、「情報活用力」を駆使して課題に取り組む活動が展開できたと考える。

このように、「親しむ・情報を得る・情報を活用する」の3つの段階を意識して、学年の発達段階や興味関心に応じた活動を積み重ねていくことによって、子供たちにとって新聞が身近な存在となり、学習の材料や情報源として認知され、その成果として「情報活用能力」が高まることにつながっていくことを確信した。

4. 新聞についての私見

これは先ほど述べた6年生の実践に関わって、静岡新聞社榛原支局の足立健太郎記者とのやりとりから新聞について考えたことである。

足立記者からの質問の内容は「デジタル化が急速に進む教育現場において、新聞が児童に与えられる要素とは？」であった。

(1) 印刷された紙媒体の保存性

タブレットに表示されるネットの情報はプリ

ントアウトしない限り、あっという間に更新、破棄されていってしまう。その点、新聞はとおきさえすれば、後からでもいつでも情報を読み返すことができる。特に小学生のうちは、印刷された文章や記事を何度も読み返し、既習事項や映像的イメージとじっくり結びつけていくことが大切だと考える。その点において保存性は重要である。



(2) デジタルの長所、短所は新聞との比較によって感じ取れる

何事も比較対象がなければ、そのものの持つ長所、短所に気づかないことが多い。デジタル一辺倒ではなく、アナログの紙媒体とデジタルの両者に触れて比べることで、どんな場合にどちらが活用しやすいのかがわかってくる。また、それぞれのより有効な活用方法も見えてくるのではないだろうか。



5. 終わりに

タブレットが普及し、子供たちも個人作業としての情報取得や発信が主流となっていくことが予想される。だからこそ、必要なときには額を寄せ合って、一つの記事についてとことん議論し合う材料として、これからも新聞を学校における重要な教材の一つと位置づけていきたいと考える。

関わりを通して、NIEで学びを広げよう

浜松市立上島小学校 笠原 吏沙

1. はじめに

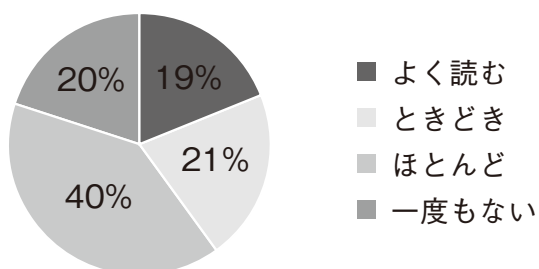
本校は、浜松市中区に位置する。各学年4～5学級、発達支援学級が3学級の計29学級、全校児童約850名という大規模校である。

2021年度からNIE教育実践指定校となったが、今までNIE教育について研修を積んでいなかったため、ゼロスタートとなった。

まずはNIEを実践していく上で、児童の実態を把握することが必要だと考え、全校児童に簡単なアンケートを実施した。結果は、新聞を読む児童は約4割、ほとんど読まない児童6割。役立つと思う児童は約8割、難しいと思う児童は約6割であった。また、アンケートの他に、NIE活動に取り組む上で課題だと感じたことは、家庭で新聞を取っていない児童も多く、新聞に触れる機会自体が少ないということである。よって、児童たちにとって新聞は役に立つものではあると思っはいるものの、新聞を読む機会が少ないため、単に難しいものであるというイメージが強いことが分かった。

このような実態から、本校のNIE活動推進には、児童たちが新聞に慣れ親しむことができる環境作りや新聞の良さを感じることができるよう実践が必要だと考えた。そのため、実践は授業だけでなく、授業以外での取り組みも行うことで、より多く新聞に触れる機会を増やし、新聞に対する抵抗感をなくしていきたいと考えた。

新聞は読みますか？ 全体



〈全校児童に行ったアンケート〉

まずは、見通しを持つために、いろいろな学校の取り組みを参考にしたり、講師を招いたりすることからスタートすることにした。

しかし、手探り状態で始めた1年目は、学校全体に実践を広げることができず、多くの反省が残った。こうした1年目の振り返りを生かし、2年目の実践を充実させた。本研究報告書は、2年目の実践を主にまとめたものである。

2. 実践内容

(1) 全職員でNIE研修を行うための取り組み

①NIE研修部の設置

1年目は、本校の教育活動におけるNIE教育の位置付けが明確でないままでの実践となっていたため、校内研修とNIE教育を別のものと捉える考えが強く、一部の教員での実践となってしまう。また、大規模校であるがゆえに、教員の足並みをそろえての実践の難しさを感じた。

そこで2年目は、「NIE教育実践指定校」という貴重な機会を、別のものと捉えるのではなく、本校の研修に有効な手立ての一つとして考えられないかと、NIE教育に対する教職員の意識を変えていくことから取り組んだ。まずは、「全員で取り組む」という意識を高めるために、NIE研修を研修組織に取り入れることにした。各学年で1名、NIE研修の担当を決め、各学年の担当教員を中心に研修を進めていくことにした。そして、本校の研修主題である「関わり」を重点とした「自ら考え、進んでかかわって学ぶ子」の育成の手立ての一つとしてNIE教育を取り入れていくことを考えた。そこで、NIE研究テーマを、全教職員で検討のもと、本校の研究主題である「関わり」をキーワードに設定した。

研修組織 研究推進部 ・深い学びを引き出す単元構想の在り方 ・授業検討、授業環境整備 ・主体的・対話的・深い学びに向けた授業支援の在り方の検討 ・「学年1実践」の推進 ・一人1実践の授業案検討、事後研修 ・計画訪問の運営、立案 ★ 各研修部での提案の検討、確認	
キャリア研修部 ・キャリア教育で育てたい力の設定 ・深い学びを引き出す単元構想の工夫 ・キャリアパスポートに関する指導 ・年間指導計画の作成 ・指導と評価	重点研修部(NIE研修) ・NIEを取り入れた授業推進 ・授業実践の提案 ・教科、教科外の授業実践の検討 ・研究発表資料の作成や検討 ・指導と評価
教科研修部(全教職員) 学年研修(全教職員) 全体研修	

〈2年目に設置したNIE研修部〉



〈新聞社ごとに整理〉

②夏季研修の充実

NIEコーディネーターを講師として招きNIEとは何かということや、その必要性、実践例などを講義していただき、基本的な知識の習得や今後の実践の見通しを職員全体で共有することができた。その上で各学年の年間計画に、どの教科や単元でNIE活動を取り入れることができるのかについて話し合う時間を持ち、職員全体でNIEに取り組む体制を整えた。



〈2022年7月26日付朝刊中日新聞に掲載された夏季研修の様子〉

(2) NIEに取り組むやすい環境整備

全校体制で取り組むためには、毎日配達されるNIE用の新聞をどのように活用していくかを考えることが必要であると考え、各学年のNIE担当者で集まり話し合った。配達部数も限られていることや職員が手に取りやすい利便性などを考え、職員室内の印刷室の一部に、新聞の置き場所を作って、いつでも手に取れるようにした。新聞は新聞社ごとに整理して置いたり、切り貼りしてもよい置き場所も作ったりして、活用しやすい工夫を行った。

また、中日新聞社作成のNIE学習シートも学年ごとに整理したり、作ったワークシートを保管して誰でも利用できるようにワークシート集を用意したりした。そして、このような取り組みを研修日より発信し、共通理解を図った。

3. 授業実践

①国語科「スイミー」(2年)

「めざせ! しん聞記しゃ! レオ=レオニさんのお話をしようかしよう」という単元名で取り組んだ。導入では、「スイミー新聞」でお話を紹介するという課題を設定した。

まずは、図書室で子供新聞を見て、新聞は、どんなものなのかを確かめた。また、スイミー新聞の見本を示しどんなものを作り上げていくかイメージを膨らませた。児童たちからは、「新聞を作りたい」「新聞記者になりたい」という声が上がった。そこで、あらすじをまとめるメモをワークシートではなく、新聞記者の手帳のようにした。取り組む意欲が高まり、楽しく活動することができた。

その結果、児童たちは、新聞記者になったつもりで積極的に学習に取り組んだ。

単元の終わりには作った新聞を使い、お話を紹介する活動を行った。

友達と新聞について交流する中で、相手の意見を聞いたり考えを伝え合ったりすることができ、キャリア教育の目標「かかわる力」(人間関係形成・社会形成能力)を育むことができた。



〈あらすじメモ〉

②算数科「10000より大きい数」(3年)

「10000より大きい数」という単元の発展的な学習として、新聞の中から10000より大きい数を探す活動を行った。児童たちは、初めはより大きな数を探すことに夢中になっていたが、だんだんと活動を深めていく中で、数の内容を新聞から読

み取る姿が見られるようになった。「日本の刑務所の数ってこんなに多いんだ」「国（日本）で一年間に使うお金ってこんなにあるんだよ」など、友達と意見を交わし合い、考えながら活動を進めていく中で、全ての児童たちが、多くの記事に目を通しながら、身の回りにある大きな数を意欲的に捉えることができた。



〈新聞から数をさがす児童〉

③国語「アップとルーズで伝える」（4年）

単元の導入では、新聞からアップとルーズの写真は何枚か取り上げ、見比べさせることで、アップとルーズの特徴について盛んな意見交流が行われるとともに、学習内容への意欲づけを行うことができた。

単元後半には、新聞記事で筆者の思いが一番伝わる写真について取捨選択する活動を行った。記事の内容は、主体的な取り組みができるよう、自分たちが実際に体験した運動会についての記事を取り上げ、本校のNIEコーディネーターに記事を書いていただいた。

初めは、写真無しの記事から筆者の思いを読み取り、その後、その思いに合った写真を5枚の写真から選ぶ活動を行った。児童たちは学んだことを生かしながら、どの写真が筆者の思いが一番合っているのか真剣に考え、クラスの児童全員が自分の考えを持つことができた。意見交流では、お互いの意見に共感する姿が見られ、振り返りでは初めと終わりで考えが変わったと話す児童もあり、児童たちの考えの広がりや深まりを感じることができた。

最後には、実際に記事を書いたプロの記者の話聞いた。児童たちの感想には、「記者の人が読み手や写真に写っている人のことまで考えて写真を選んだり、記事を書いたりしているなんて思わなかった」「これからは、読み手のことも考えて新聞作りをしたい」などの意見があり、プロの記

者の講話を聞くことで、読み手により分かりやすく新聞を書きたいという思いを高めることができた。その後、国語科「新聞を作ろう」の学習で新聞作りをした。読み手に分かりやすいように意識しながら文章を考えたり写真を選んだりする姿が見られ、どの児童も意欲的に新聞作りを行うことができた。



〈NIEコーディネーターをゲストティーチャーに〉

④社会科「暮らしを支える食料生産」（5年）

普段食べている食料品の産地を調べ、学習問題をつくる活動を行った。自分の暮らしと食料品を自分事として捉えるようにするために、自分たちの住んでいるまちのスーパーマーケットの広告を集め、切り抜いて産地ごとに仕分けする活動を通して、自分たちの食べている食料品が日本や世界の各地に広がっていることを知る事ができた。活動をグループ活動で行ったことで、時間内で多くの食料品を仕分けるために役割分担を考えたり、産地の広がりや友達と考えたりすることができた。友達と関わりながら考えを広げる効果的な手段だと感じた。



〈広告をもとに交流する児童〉

4. 授業以外での実践

①教師によるニュースの紹介（1年）

朝の会の時間に、前日の主なニュースで、児童が興味を持ちそうな新聞記事を見せながら、紹介

した。その新聞記事は、黒板に貼ったり、ロッカーの上などに置いたりして、休み時間に見られるようにした。そして、興味を抱いた児童がいつでも見ることができるように、背面掲示板の「ニュースからまなぼう」コーナーへ翌日以降に掲示した。

また、その月の主なニュースの載せた用紙（「〇がつのニュースアンケート」）を児童に配付し、その月にどのような出来事やニュースがあったかも振り返らせた。そして、自分が特に印象に残った記事を5つほど選んで〇をつけさせ、学級全体としてどの記事に興味を持ったのか、その傾向を紹介した。

これらの実践により、今まであまり関心を持たなかった世の中の出来事や様々な分野の話題を知り、知識の幅を広げることができた。



〈掲示された新聞を読む児童〉

②朝の学習活動をNIEタイムに（4年）

毎週金曜日の朝の学習活動を「NIEタイム」と名付け、自分が興味・関心のある新聞記事をスクラップしたり、デジタル新聞を読んだりする時間にした。スクラップした記事を貼って感想を書くワークシートを用意し、毎週金曜日の家庭学習にした。初めはどの記事をスクラップしようか悩んでいる児童もいたため、教師が児童たちの興味・関心がありそうな記事を選び作成したワークシートを配布した。回数を重ねると、自分で記事を選ぶことができるようになった子が多くなり、感想から新聞によって新たな知識を得たり考えを深めたりしている様子が見え始めた。

また、様々な情報や意見に触れ合うことができるように、友達同士でワークシートを読み合ったり、良い意見が書かれた子の記事はクラスや学年掲示板に掲示したりした。活動の中で「わたしもこの記事見たよ」「すごいね、見て」など、自然に児童同士の会話が生まれ、新聞を通して児童同士の関わりや学びをより深めることができた。ま

た、家庭でも自主的にスクラップをしてくる児童もおり、新聞を進んで読み、学ぼうとする姿が見られるようになった。

また、読んだ記事の内容をノートにまとめたり、感想を書いたりした。お互いのノートを読み合い、交流する場を設けた。デジタル新聞は、手軽にニュースを見て情報を収集したり、ふりがなも振ってあるため読みやすかったりと、児童にとって活用しやすく、紙面の新聞とは違ったメリットがある。そのため、NIEタイムだけでなく、空いた時間や休み時間などに進んで活用する姿が見られた。



〈掲示された友達のワークシートを読んだり、コメントを書いたりする児童たち〉

③毎日、宿題で「NIE・学習シート」を実施（6年）



〈NIE学習シート〉

宿題として行っている算数プリントの裏面に「NIE・学習シート」を印刷し、毎日、取り組んだ。最初は、文章を読むことを苦手と感じ、必要な情報や内容を読み取ることが難しいと感じる児童がいた。

しかし、毎日、繰り返し行うことで、文章を読むことに慣れたり、必要な情報がどの辺りに書かれていたりするかが分かるようになった。この取り組みにより、児童たちの読解力の向上、社会に対する視野の広がりや知識習得につながった。

④「にこにこ見つけ」（発達支援学級）

年間を通して、新聞の写真記事から笑っている写真を探し、理由を読み取る活動をした。学習の進め方が分かりやすく、自力で学習を進めることができた。予想した理由や友達と相談した結果

は、多少違っていても子供なりの根拠があれば認める方向で支援した。参観会では、NIE活動を保護者に紹介し、同じ活動と一緒に取り組んでいた。保護者が関わることで、正しく理由の読み取りができた。



〈参観会でお母さんとNIE〉

5. 成果と課題

NIE実践を終え、児童や教員にアンケートを行った結果、以下のような声を得られた。

【児童の声】

○低学年

- ・今まで知らなかったことを、いろいろ知ることができてよかった。
- ・新聞を作ったら、もっと他のことも新聞で伝えたり、分かりやすく書いたりしたいと思った。

○中学年

- ・新聞は一度にいろいろなことが分かるところが、新聞のよさだと思った。
- ・今まで新聞を読むことがなかったけれど、NIE活動のおかげで新聞を読むようになって、いろいろなことを知りたいと思うようになった。

○高学年

- ・新聞作りを通し、写真や見出しを工夫し、読者に分かりやすく伝えることの大切さを学んだ。
- ・ネットは自分が知りたい情報しか出てこないけれど、新聞はいろいろな情報を知ることができる。

○発達支援学級

- ・みんなで新聞の記事を読んだり、話し合ったりして、すごく楽しかった。

【職員の声】

- ・学んだことを新聞にまとめることで、表現力の育成や、ペアやグループで取り組むことでコミュニケーションの育成にもつながった。
- ・子供たちにとって、新聞は難しいという印象が、「たくさん情報を知ることができるもの」といった前向きな印象に変わってきた。
- ・大事なことや必要な情報を文章から読み取る力がついた。

①成果

最初に行った児童の実態アンケートと実践後のアンケートを比較すると、数字としては全体的には大きな変化は見られなかった。しかし、「児童たちや職員の声」からは、NIE活動によって、社会への関心が高まったり、自分の思いや考えを伝える力の育成につながったりしたことが読み取れた。両者それぞれ、新聞を身近に感じ、その良さを知ることができたことが分かった。

また、NIE研修部を立ち上げ、全職員で取り組む体制を作ったことで、いろいろな教科での学習や授業以外での実践を行うことで、新聞に慣れ親しむ環境を多く作ることができた。さらに、本校の研修主題である、「関わり」を重点とした「自ら考え、進んでかかわって学ぶ子」の育成と絡ませたNIE実践を行うことで、児童たちは友達との関わりの中で、自分の学びや考えを広げたり深めたりし、コミュニケーションの育成につながった。

②課題

アンケート結果から分かるように、まだ新聞を難しいと感じている子は未だ多く、自ら手にとって進んで新聞を読んだり、まとめたりする子は少ない。実践としても、学年によっては新聞を教材として取り入れることが難しいと感じ、新聞にまとめる活動に偏ってしまい、実際の新聞に触れる機会をあまり作ることができなかったという声もあった。また、NIE教育を日頃の教育活動に取り入れていくことの難しさも感じた。

6. おわりに

今回、NIE教育実践指定校という機会をいただいたことで、本校の目指す子供たちの姿（関わりの中で自他の成長、よさを実感できる子）の育成につながったことは確かである。また、多くの課題があったものの、新聞が教育に有効な教材の一つとなることが改めて分かった。そして何より、本校のような大規模校では、職員全員が、目標を明確にし、皆で同じ方向を向いて取り組むことが子供たちのよりよい成長につながるということを学ぶことができた。今後も、この2年間の研究と実践を生かし、児童たちが新聞をより身近に感じ、新聞のよさや魅力を生かすことができるような取り組みを継続していきたい。

自分を取り巻く社会へ目を向け、自分の視野を広げる

静岡大成中学校 片井 奈美

1. はじめに

(1) 本校の紹介

本校は、明治36年に創立され、今年で創立119年を迎える歴史と伝統がある。創立100年の節目には、女子校の静岡精華から共学の静岡大成と校名を変え、現在に至る。

建学の精神

「時代に即応する新しい人材の育成」

校訓 「凛々しきこと、優しきこと」

これからの時代を担う「人」を育てることを目標に、自分の考えをしっかりと持ち、相手の立場に立って物事を考えることができる人、穏やかで思いやりがあり、人のために行動できる人を目指している。

本校の生徒数は、1年生48人、2年生48人、3年生58人、1クラス18人～25人の小規模校である。

(2) 実践にあたり

本校のNIEの目標

「NIEの活動を通して、自分を取り巻く社会へ目を向け、自分の視野を広げる」

本校がNIEを進めるにあたっては、通常さまざまな学習活動を妨げず、新たなNIEの活動時間をどう捻出していくのか、どのような内容で実施するのかが課題であった。

生徒に無理がないように、職員にも負担にならないように実施していくことを心がけて実践をスタートさせた。

2. 実践内容

(1) これまでの実践

しずおか新聞感想文コンクール

夏休みの課題として全生徒が新聞記事を使って作文を書く活動を10年以上継続して実践してきた。令和2年度、令和3年度、令和4年度

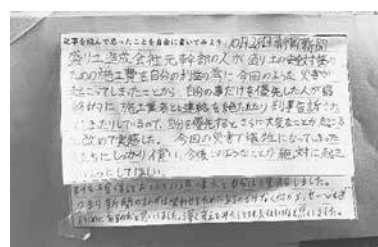
は3年連続して学校賞を受賞している。

(2) 実践1年目の取り組み

生徒会主導による新聞紹介コーナーの設置

生徒会で実施したアンケートでは、新聞を家で購入していない家庭が25%あった。新聞を家で購入している75%の家庭の生徒のうち、普段は新聞を読まない50%、1週間に1回読んでいる17%、1週間に2～3回読んでいる33%という結果であった。

アンケートの結果を受け、生徒会は「みんなに興味を持ってもらえる記事を掲示して、読んでもらう」を目標に活動を開始した。毎週定例会議を行い、興味のある新聞を探して感想をまとめ、新聞紹介コーナーを作った。最初は、フォーマットを用意したが、継続するうちに自分たちでまとめ方を工夫したり、より注目してもらえるように掲示の仕方を工夫したり始めた。また、「古新聞がもったいない」という声から、有効活用する取り組みとして、ゴミ袋を作成して配布したり、掃除のときにガラスや鏡のふき取り用に利用したりする活動が自然に始まった。生徒会主導により、生徒が自分たちで話し合っ、やれることを探して実行していく様子を頼もしく感じた。



(3) 実践 2年目の取り組み

1年目の生徒会活動で、生徒の関心が高かった分野、身近に感じた分野がSDGsだった。生徒会の生徒からSDGsをテーマにNIE活動をしたいという要望があったため、2年目のテーマをSDGsとしてNIE活動を進めた。

① 新聞紹介コーナーの設置

1年目の新聞紹介コーナーをSDGsらしい掲示版にデザインを一新し、SDGs関連の新聞記事に絞って新聞紹介を継続した。

② 新聞紙を使って～壁新聞作成～

SDGsの基盤である「不平等をなくそう」「暴力や差別をなくそう」「地球環境を守ろう」をメインテーマとして、道徳や学活の時間を活用して新聞作成に取り組んだ。個人で考える時間、持ち寄った記事を紹介する時間、意見を交換したり内容やデザインを相談したりする時間などを経て、クラスごとに3～4枚の壁新聞が出来上がった。壁新聞は、それぞれ発表し合い、お互いを評価する時間を持った。1年～3年までの全クラスが壁新聞を作成したことで、学年ごとの工夫や、そのクラスらしさが現れた壁新聞となった。



③ 生徒会新聞作成「静岡大成中学校のSDGs」

生徒会は、校内の活動の中にSDGsに関わっている活動がたくさんあることに注目し、「静岡大成中学校のSDGs」という新聞作成に挑んだ。校内活動の中で、SDGsに関わっている活動を挙げて、その活動をタブレット上で意見交換しながら、分類分けし、新聞にする題材を決定した。生徒会新聞は、全校生徒や教職員だけでなく、学校外へ発信することも想定し、キーボードで打ち込んで作成した。教員側から働きかけたのは、「グループは縦割りにすること、調べる・取材をする・記事を書く順番で作成すること、新聞のレイアウトや文体などをまねること」だけで、ほぼ生徒の力だけでタブレットを活用して、新聞作成を進めた。中学生だけでなく、高校生や先生方にもアンケートやインタビューを行い、新聞の広告欄もまねてオリジナル広告を作成したり、お互いの原稿を校正し合ったりしながら、4か月かけて新聞の完成にこぎ着けた。大変な作業だったと思うが、協力しながら最後まで仕上げた過程で得たものは大きく、どの生徒も充実感や達成感を感じていた。



3. 成果と課題

(1) 成果

生徒にとって新聞紙は、あまり触ることがない、読むこともないものであったが、たくさんの新聞を提供していただいたおかげで、新聞に触れて開いて読む経験を全ての生徒が体験できた。壁新聞づくりで、生徒が生き生きと楽しく活動している姿が印象的であった。また、NIEの活動を生徒会活動に位置付けたことで、生徒主導でさまざまなアイデアが出され、生徒が主体的に活動を行うことができた。生徒が達成感を味わうことができとても有意義な活動となった。

(2) 課題

授業の中で、新聞を教材として使用する場合には、紙の新聞から教材を探すのが大変で、作業にとっても時間がかかった。手軽に新聞を活用することを考えると、ICT活用が進んでいる現在ではデータベースの記事の方が使いやすく感じる。

本校では、5社の新聞（静岡、朝日、毎日、スポニチ、朝日中高生新聞）を購読し閲覧可能となっている。インターネット環境では、日経テレコンやNewspicsを取り入れている。さまざまな情報ツールが与えられている中で、生徒にとってはスマートフォンやタブレットがいつも手元にあるため、データの記事に触れる機会が多い。紙の新聞は意図的に与えないと全く触れずに生活してしまう。

紙の新聞でなければできない経験もあるし、データの方が利用しやすい授業もある。新聞を学校現場で活用する際には、新聞を通してどんな経験や学習をさせたいのか、目的を明確にして、紙とデータの新聞を使い分けて導入する必要性を感じた。

NIEで身近な社会を！

浜松学芸中学校 大場 裕幸

1. はじめに

本校は浜松市に位置する静岡県で2番目に古い私立学校である。もとは女子校であったが、1996年に男女共学、2008年に中高一貫校となり、現在に至っている。今回NIEの実践を行った中学部は、各学年約50人で構成され、全学年合わせても約140人の小規模集団である。そのため、生徒同士はお互いの意見を言いやすい環境にあり、温かな雰囲気の中で生活をしている。NIE実践指定校に任命されるのは10年ぶり2度目であり、前回の頃からの活動をブラッシュアップするとともに、新聞を利用した授業のカリキュラム化を目指して活動を行った。

2. 実践指定校以前のNIE活動

(1) 新聞の置き場所とその利用

①本校の図書室には朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日経新聞などの全国紙が配置されている。高校生が探究活動や推薦入試対策に利用しやすいように、過去の新聞も数多くストックされており、新聞を手に取りやすい環境が整備されている。また図書室横の防火扉には、全国紙の一面を比較したコーナーが作られており、各社ごとの論調の違いが一目で分かる掲示が作られている。



〈図書室の新聞〉



〈新聞ストック〉



〈図書室横の新聞1面掲示〉

②中学校の教室があるフロアには地元紙である静岡新聞と中日新聞が配置されている。本校は中学校開設以来、社会科の授業内でスクラップブックリレーを行っている。この新聞は共用新聞ではあるが、切り抜きの自由を認めている。



〈中学校の新聞閲覧スペース〉

(2) 実践指定校以前の成果と課題

①図書室の新聞閲覧コーナーは充実しており、生徒が新聞を手に取りやすい環境が整備されている。特に図書室横の掲示に関しては、興味関心をもって見ていく生徒も多くみられた。今後もこの環境を維持していきたいと考えている。

②中学校では閲覧スペースは確保されているものの、ストック数が少なく、全学年の生徒がスクラップブックリレーを行うには十分な新聞

量が確保できていなかった。また、コロナ禍による授業時間不足もあり、スクラップブックリレーも停滞しており、改善が必要な状態である。

3. 新たな実践の取り組み

(1) 新スクラップブックリレー

これまで、知識のインプット・アウトプットを目的に社会科の授業でスクラップブックリレーを行っていたが、本年度より、中学3年生の朝の会で行うようにした。変更の理由は「社会科の授業時間の確保」、「新聞に毎日触れる」、「多様な視点でニュースを考える」の3点である。

生徒は新聞閲覧スペースから気に入った記事を選び、ノートに貼り付けるとともに、記事の要約と意見を400字程度でまとめる作業を当番制で行った。1面から記事を選ぶ生徒が多かったが、慣れていくうちに社会面や地方面から記事を選ぶ生徒も増えていった。



〈記事の感想を述べている様子〉



〈生徒の作ったスクラップブックノート〉

(2) 人物にこだわった掲示

キャリア教育の一環として、人物紹介に関する記事を廊下掲示した。「どんな仕事に就きたいか」

ではなく、「どんな人になりたいか」をテーマにし、気になる人をピックアップして、その理由をワークシートにまとめる活動を行った。気になる人を選ぶ基準として、「名詞」ではなく「動詞」で選ぶように事前指導を行った。「教える」ことに興味がある生徒は教員を紹介した記事を選んだり、「頑張っている人を応援する」ことに興味がある生徒はボランティア活動で活躍している人の記事を選んだりすることができた。



◎ 新聞から選んだ人物・選んだ理由

「多分何人かを選ぶ」ということを伺った時に、私は応援する、という動詞目に着目して選んでみようと考えました。そこで、見出しに「支援」と書かれている記事を見つけ、内容を読んでもっと魅力的な仕事をされている方だったので、その記事にあった、「小浦まつみさん」を選びました。小浦さんは、「NOPPOKUN」というアットロード店を営んでいる方で、発展途上国と先進国の間の対等な関係での貿易の普及に、25年間、尽力されていらしました。現在、アットロードへの関心が高まっていることもあり、売り上げが落ちたことはないらしく、人助けの精神をもて感動された人一人と言えそうです。

◆ 感想 ◆

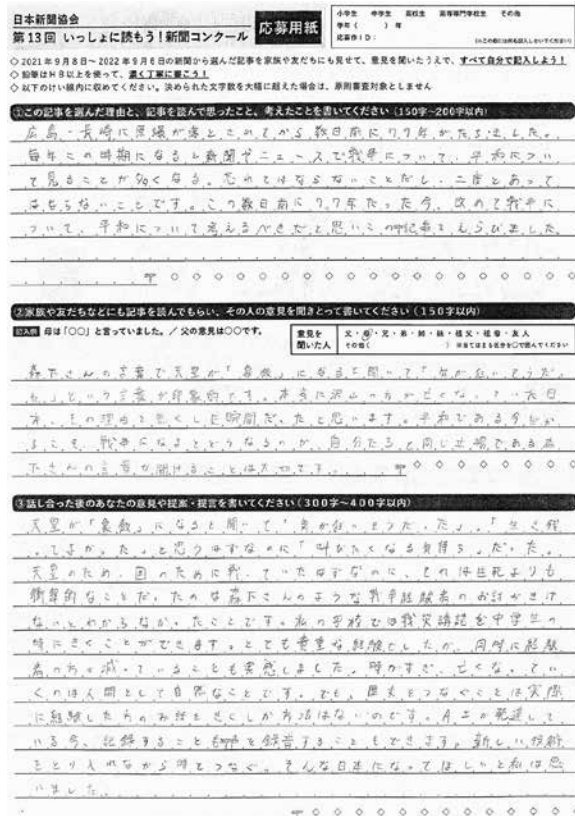
私この方を愛いと思理由は3つあります。1つ目は、選んだ人物の所に書かれた「人助けの精神」です。2つ目は「自分事として捉える姿勢」です。小浦さんは「大着道53の『人間の大きさ』を読んだら、朝は日本がアットロードに思っています。私は残念ながらその本を読んだことは無いのですが、私たちが、「世界は私に大変な所があるんだ。でも日本は平和で良かったな」という感想を抱くでしょう。そこを小浦さんは、日本をスワゾンに伝えるほど、差別に考え、自分事のように扱っています。今の私は到底真似出来ないことだと思いましたが、3つ目は、「行動力」です。小浦さんは「人間の大きさ」を読んだことをきっかけに、東南アジアへボランティアの旅に出ます。更にそこで感じたことから、外国産の商品を使い始め、アットロードまで開店されてしまいました。1冊の本がここまで行動力が出来るなんて、並大抵の行動力ではないと感じました。私も、この方の姿を見習っていきます。

〈生徒のワークシート〉

(3) 「いっしょに読もう！新聞コンクール」への出品

批判的思考力の育成、多面的な思考力の育成を

目的として、「いっしょに読もう！新聞コンクール」に出品した。自分が選んだ新聞記事を家族・友人に読んでもらうことにより、自分と異なる意見があることを知り、世の中を多面的に見る習慣を身につけた。



〈生徒の作品〉

(4) 新聞づくり

本校の社会科はざぶとん型のカリキュラムを採用しており、中学1年生で「地理」、2年生で「歴史」、3年生で「公民」を履修している。それぞれの学年で学ぶ内容に合わせてテーマを設定し、長期休みごとに新聞づくりを行った。

	1年	2年	3年
夏	国調べ 新聞	偉人 新聞	現代の諸 課題新聞
冬	都道府県 新聞	戦国武将 新聞	修学旅行 新聞
春		市民革命 新聞	

※夏休みの作品は中日新聞社主催の「新聞作品コンクール」に出品した。



〈コンクールでの受賞作品〉

中3生は完成した新聞をA0サイズに拡大して、プレゼンテーション大会を行った。



〈プレゼンテーションの様子〉

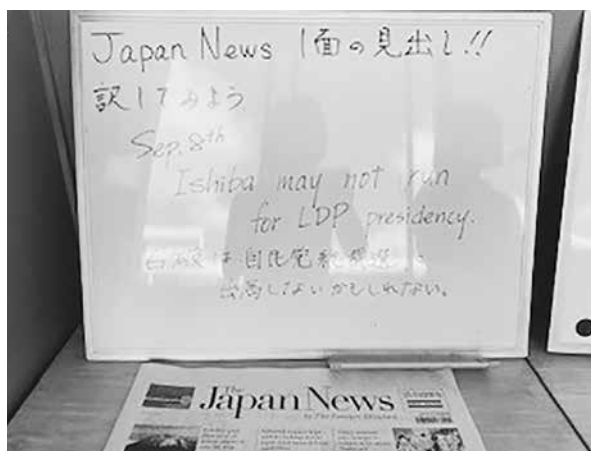
(5) 「県議会だより」の活用

1月に、昨年の静岡県の重大ニュースを振り返り、静岡県で起きている問題について話し合った。その上で、問題の原因や問題の解決策をグループごとにまとめて発表した。授業の最後に「県議会だより」を配布し、静岡県で起きている問題解決のために、静岡県議会がどのような話し合いを行っているか。また、自分たちの意見が議会に反映されているかを検証していく活動を行った。



(6) 英語科によるNIEの実践

4か月間「The JAPAN News」を購読した。その際、英語の授業を利用して見出しの翻訳に取り組んだ。新聞の見出しはメモのような省略英語のため、翻訳するには英語力よりも想像力・時事に対する知識が必要とされた。生徒はグループ内で話し合ったり、日本語新聞の1面と比較したりしながら、活動に取り組むことができた。



「Ishiba may not run for LDP presidency.」

「石破は自民党総裁選に

出馬しないかもしれない。」

4. 実践の成果と課題

(1) 新スクラップブックリレー

スクラップブックリレーを朝の会に移行した結果、毎日の生活の中に新聞が取り入れられるようになり、生徒にとって新聞がより身近な存在になっていった。また、本校では「チーム担任制」を導入しているため、3人の先生が日替わりで朝の会を担当している。そのため、先生達がそれぞれの教科の立場から独自の視点で意見を述べてもらうことができ、時事に対して多面的な見方ができるようになった。ただ、学校で自由に使用できる新聞が2紙しか無かったため、中学3年生限定の活動にとどまってしまったことが課題として残ってしまった。今後はインターネットニュースをプリントアウトしたものも利用しながら、活動を全学年に広げていきたいと考えている。

(2) 人物にこだわった掲示

生徒の知り合いが登場することもあり、興味関心を持って掲示を見ていく生徒も多くみられた。しかし、掲示自体は教員の手によるもので、生徒達の自主的な活動に落とし込むことができなかった。そのため時間が経つにつれて、生徒が飽きてしまう様子もうかがえた。キャリア教育の一環としては手応えを感じているため、今後は生徒が積極的に関わられる仕掛けを作り、ブラッシュアップしていきたいと考えている。

(3) 「いっしょに読もう！新聞コンクール」への出品

批判的思考力の育成、多面的な思考力の育成という目標は達成できたように感じる。夏休みの課題にしたことにより、家庭内でも時事について話し合うきっかけを作ることができた。来年度以降も継続的に行っていききたい。また中学を卒業し、高校生になった生徒達に「しずおか新聞感想文コンクール」への出品を促し、継続的かつ、より発展的な活動へと昇華させていきたい。

(4) 新聞づくり

定期的に新聞づくりを行った結果、生徒の情報発信力が飛躍的に向上した。中日新聞社主催の新聞作品コンクールに出品して受賞する生徒も多くみられ、生徒のモチベーションにつながってい

る。この新聞づくりを通して、インパクトのある見出しづくり、グラフや写真などのデータを有効に活用する技術を習得することができた。また新聞を自分で作ることで、新聞の構造を理解し、新聞の効率的な読み方を習得することにもつながった。今後は、中学3年生で行ったプレゼンテーション大会をいかに発展させていくかが課題である。プレゼンテーション大会では、自分の作った新聞の解説は堂々で行えるものの、他者の新聞に対して意見・質問する姿がほとんど見られなかった。「批判的思考力」とともに「質問力」を身につけさせる仕掛けも考えていきたい。

を活用した「身近に感じる社会」を継続的に実践していきたい。

(5) 「県議会だより」の活用

選挙年齢が18歳となった現在、中学生の頃から政治経済に興味を持ち、政治参加に対する意欲を高めていく必要がある。普段手に取ることの少ない「県議会だより」を読むことは、生徒にとって良い刺激になった。「県議会だより」を使った授業実践は1回しか行うことができていないが、今後も継続していきたいと考えている。

(6) 英語科によるNIE実践

今回、「The JAPAN News」の見出しを翻訳したことにより、生徒の文章読解力を向上させることができた。「LDP = 自民党」のような教科書では習うことのない単語や表現も多くみられ、生徒は想像力を膨らませながら文章読解に取り組むことができた。これは長文読解の際に、分からない単語を前後関係で読み解いていく力につながっていった。英語教員も継続していきたい実践であると述べていた。しかし、大きな事件が発生すると同じ事件の記事が何日も続いてしまうため、マンネリを起しやすく、生徒が飽きてしまう様子も見られた。また、「The JAPAN News」定期購読するための予算の確保などの問題もあり、検討が必要である。

5. おわりに

2年間という短い間ではあったが、充実したNIE活動を行うことができた。今回の活動が一過性のものにならようにする努力こそが一番の課題だと考えている。新聞の購読率が低下している現在、デジタルコンテンツの利用も含めて、新聞

生徒の手に新聞を

— 新聞活用の実践と挑戦 —

静岡県立御殿場南高等学校 芹澤 光

1. はじめに

本校は昭和 38 年に、「地域に貢献する優れた人材を集め育成する」という理念である「鍾駿」を建学の精神として開校され、令和 4 年で創立 60 周年を迎えた。地域のリーダーとなるべき人材を育てるために、日々の学習や部活動等に主体的に取り組む姿勢や、他者との協働を尊ぶ人間性豊かな生徒の育成を通して「こころざしを育む学校」を目指す学校像としている。

2. 本校におけるNIEの課題

本校は 2021 年度より、NIEの実践指定校になり、本年度で 2 年目になる。NIE実践指定校では 4 社の新聞が毎日 1 部ずつ提供されているが、加えて本校では、地域の新聞店より各クラスに新聞（朝刊）が毎日 1 部、無償で提供されている。このように本校では、新聞に関して充実した環境が整っており、新聞を活用した学習や活動を推進する土壌が存在していると考えられる。

しかし実際に生徒と新聞の関わりを調査すると、大きな課題が見えてくる。令和 4 年 4 月に、本校 1 年生 132 名に新聞に関するアンケートを実施した。まず新聞閲覧の頻度であるが、資料 1 のように新聞を 1 週間で全く読まない生徒が 6 割、1 日以下の生徒が 2 割であり、新聞が日常的に読まれていないことが分かった。

資料 1 新聞閲覧の頻度

1 週間の中でどのくらい新聞（紙もしくは電子版）を読みますか。	% (132 人中)
全く読まない	61.4
週に 1 日以下	25.8
週に 2～3 日	8.3
週に 4～5 日	1.5
毎日	3.0

また新聞を含めたニュースを見聞きする方法では、資料 2 のようにテレビやインターネットのサイトの人数が多く、平素の情報収集の手段として新聞が使われていないことが分かった。

資料 2 ニュース等の情報収集の手段

ふだんニュースを見聞きしたりチェックしたりする方法は何ですか(複数回答可)。	人
新聞（紙）	22
新聞（電子版）	10
テレビ	116
ニュース系サービスサイト	72
Twitter	31
YouTube	47
Instagram	23
TikTok	22
ニュースを見ない	2

以上のように生徒は新聞を手に取り読む習慣が身につけておらず、新聞を活用した活動を構想する上で、新聞を「使う」と同時に、新聞を「読む」という活動の必要性を感じる結果となった。その一方で、資料 3 の新聞を読む必要性に関しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」生徒の割合が 7 割を超えており、新聞という媒体の信頼性や読むことによる効果を実感している生徒が多く、「読んだ方が良くと思うが読まない」というギャップをいかにして解消していくかが課題として捉えられる。

資料 3 新聞を読むことの必要性に関する実感

新聞を読むことは必要だと思いますか。	% (132 人中)
そう思う	25.0
どちらかといえばそう思う	50.1
どちらとも言えない	14.4
どちらかといえばそう思わない	4.5
そう思わない	5.3

3. 本校生徒におけるNIEの目的

本校生徒へのアンケート結果からも、新聞を読むことの必要性を実感しているが、新聞を日常的に読んでいる生徒は多くないことが実態として捉えられた。このような新聞の関わり方の現状を踏まえ、生徒が新聞を「読む」習慣につなげるために、まずは新聞を「手にとる」機会を多く設定し、新聞との距離を縮めることを目的として、いくつかの実践に取り組んだ。

4. 実践の概要

(1) 実践1 総合的な学習の時間における活動

本校第1学年の総合的な探究の時間において、「新聞から社会を知る」をテーマに4月下旬から5月にかけて全4回の新聞を活用した活動を実施した(資料4)。

資料4 新聞を活用した活動の計画

テーマ「新聞から社会を知る」		
	活動	目的・内容
1	新聞の構成を調べる	新聞を実際に手に取り、1面や各面の分野など新聞の構成を調べ理解する。また各新聞社の記事を比較して、視点や表現の特徴について考察する。
2	新聞スクラップを作成する	新聞スクラップを作成することで、新聞の読み方や記事内容のまとめ方を身につける。また自分の関心と結びつけ、記事内容への見方や考え方を表現する。
3	新聞スクラップを共有しSDGsの視点から読む	作成した新聞スクラップを複数人で回覧し、見方や捉え方の共通点や差異を見つける。またSDGsの視点から新聞記事を読み、地球規模の課題と結びつける。
4	新聞社の講話を聴く	静岡新聞社の記者から、新聞の魅力や読み方、SDGsとの関連についての講話を聴く。また、取材対象へのインタビューの方法などを学ぶ。

資料5 第1回のワークシート

新聞から社会を知る①							
記入日 月 日 ()							
1 2つの新聞について、1面のトップ記事の見出しを記入して比較してみよう。							
()新聞 月 日 ()				()新聞 月 日 ()			
トップ記事見出し				トップ記事見出し			
2 新聞は「面(めん)」ごとに記事の分野を「○○面」としてまとめているが、2つの新聞の「面」と分野を整理し比較してみよう。(例 面:3 分野:総合)							
()新聞				()新聞			
面	分野	面	分野	面	分野	面	分野
3 2つの新聞の中で、同じ出来事について書かれた記事を選び、読み比べて視点や表現の特徴について考えてみよう。							
記事の見出し ()新聞				記事の見出し ()新聞			
視点や表現の特徴について、わかったことや気づいたこと疑問など							

4月に実施した生徒アンケート結果から、生徒の多くは日常的に新聞を読んでいない実態が分かった。その実態を踏まえ第1回は、実際に新聞を手に取り、読み方や見方を重視して新聞への抵抗感を少なくし、2社の新聞の構成を調べ記事の比較をワークシートにまとめる活動を実施した(資料5)。

第2回では、生徒が1人ずつ新聞スクラップを作成する活動を実施した(資料6)。第1回の活動の成果を生かし、生徒自身が新聞を読み、関心のある記事を吟味し選択した。スクラップの素材となる新聞に関しては、家庭の新聞もしくは各クラスに配布されている新聞を使用した。スクラップの内容は、「新聞記事」「記事の見出し」「新聞社名(記者名)」「記事の掲載日」「キーワード」「記事のポイント」「意見・感想」「みんなのコメント」とし、生徒は記事の文章内容においてポイントとなる部分や印象に残った部分にマーカー等の線を引いた。

また新聞記事の内容とSDGsとの関連について調べ、現代的な地球規模の社会課題の観点から新聞記事を捉える活動も行った。SDGsに関しては、生徒は高校入学までに既習し、課題について活動している生徒も多く、本研究の目的である社会とのつながりを見つけるための新聞を読み解く観点として有効であると考えた。

第3回の活動では4人組グループをつくり、作成した新聞スクラップを共有した(写真1)。他の生徒が、どのような理由で記事を選んだのか、どのような意見や感想を抱いたのかなどを知ること、自己の社会的な関心を広めるとともに、社会的事象の見方や捉え方を磨く機会となった。

資料6 生徒が作成した新聞スクラップ



第4回は静岡新聞社の講師を招いて、新聞講座を実施した(写真2)。「SDGsの理解に役立つ新聞の読み方」というテーマで、生徒は一人1部新聞を手に取り、新聞づくりの魅力やSDGsと新聞記事の関連について講義を受けた。また生徒は第3回までの活動について専門家から改めて肯定的な言葉をもらい、これまでの活動に対する達成感を得た様子であった。



写真1 新聞スクラップの共有(左)

写真2 新聞講座の様子(右)

全4回による総合的な探究の時間を通して、資料7の生徒の振り返りの記述からも、新聞への関心が高まるとともに、社会と自分とのつながりを実感できている様子が見える。振り返りの記述の中で「自分の市でもなにかできることがあるのでは」と、記事を選んだ理由を説明している。生徒は新聞記事を通して、地域(地元)社会と自分との関係について認識もしくは発見することができていると考える。

資料7 新聞スクラップの生徒の振り返り(抜粋)

- ・記事を選んだ理由は、自分も行ったことのある近くの市だったから。町おこしにも繋がるようなことだったから。市民が参加していることに自分の市でも何かできることがあるのではないかと思ったから。
- ・新聞スクラップを作成して感じたことは、その出来事で結果的に起きた別の出来事についても書いてあると思いました。
- ・市の担当者や支局の人など複数の人から話を聞いて新聞を書いているのに気づきました。
- ・グループで新聞を共有して、みんな自分のメインの内容について上手くまとめられていた。
- ・何について考えるのかを明確にすると、疑問点とそれに対する自分の考えをしっかりと持てると思いました。また同じ記事でも人によって注目するところが違うと思いました。
- ・SDGsとの関連が割とあって、日常的にニュースに対してその考えが持てるようになりたいと思いました。

(2) 実践2 生徒発案の「新聞合戦」の展開

4月から5月に総合的な探究の時間において、新聞を活用した実践で、生徒は新聞の構成を知り、スクラップを作成することで自分とのつながりに気づき、多くの生徒が新聞に興味を持たと考える。その上で、生徒が自ら新聞を手にとる機会を増やすために、生徒自身が新聞の活用を企画・運営する過程を取り入れた。

学校の課題を考える組織として、9月に第1学年の各クラスの有志生徒による「みらいアイデア会議」を発足した(写真3)。

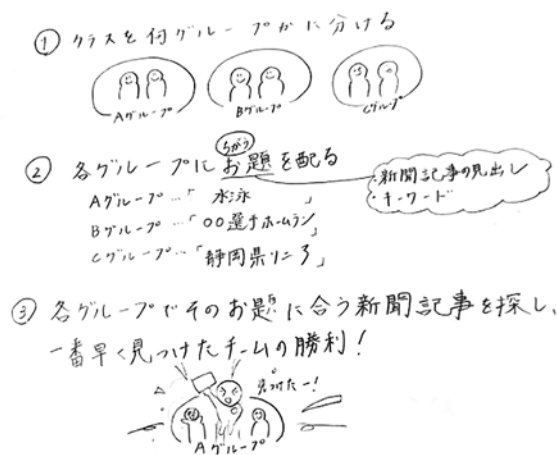


写真3 みらいアイデア会議の様子

この会議では、学校の課題に生徒が解決策やアイデアを出し実践することを目的としたが、新聞の活用をテーマに「各教室に毎日配布される新聞

をどうすれば今よりも読んでもらえるか」という課題を取り上げ、アイデアを出し合った。生徒は資料8のように、クラスをグループに分けて、各グループにお題（テーマ）を配り、各グループはそのお題（テーマ）に合う新聞記事を探すというクラス対抗のゲーム形式の新聞活用のアイデアを生み出した。

資料8 新聞活用のクラス対抗ゲームの原案



その後、アイデアを基としてルールや運用方法を検討し、「新聞合戦」という名称で第1学年を対象に10月より開始した。「新聞合戦」のルールに関しては、大きく3つ設定された。1つ目は、テーマに合った新聞記事をボードに貼る。2つ目は、新聞はクラスの新聞かデータベースを使う。3つ目は、1週間で多くの記事を貼ったクラスにポイントが入るといった内容である。

詳細を説明すると、生徒は毎週出される1つのテーマに関係する新聞記事を探し、1枚のボードに貼り付けた。1つのテーマで参加する生徒は各クラス5名であり、ボードは生徒昇降口に設置された。また7週間の全7回における各週のテーマも資料9のように、みらいアイデア会議の生徒が考案した。

資料9 「新聞合戦」のテーマ

- ・ 自然災害
- ・ 高校生の活躍
- ・ 静岡の特産
- ・ 日本人の〇〇賞
- ・ 大学に関すること
- ・ 若者の活躍
- ・ 地域発展

上記のテーマに合った新聞記事を生徒は探すのが、記事は各教室の新聞もしくは、静岡新聞デー

タベース plus 日経テレコンを活用した。静岡新聞データベース plus 日経テレコンについては9月に導入し、生徒が学校内であれば自分の携帯等の端末から使用できるように設定した。導入時には写真4のように、静岡新聞社の担当者が来校し、生徒への説明する機会を設けた。また生徒だけではなく、教職員に対しても校内研修としてデータベースの活用を促した（写真5）。以上のように、学校内における新聞閲覧の環境を、紙面とデータのハイブリッドの形として整備することで、新聞活用の機会促進を図った。



写真4 静岡新聞データベースの説明を聞く生徒(左)

写真5 静岡新聞データベースの校内研修(右)

また「新聞合戦」はクラス対抗として始まったが、クラスの色を決めて、記事を読んだ生徒が気になる箇所や印象に残った箇所に蛍光ペンで線を引くルールも追加された。これはアイデアを考案した生徒たちが、目的である「新聞を読んでほしい」という点から、「ただ貼るだけ」ではない部分を実現したいという工夫の表れであると考えられる。

「新聞合戦」が10月に始まり、開始当初は生徒が積極的に参加するか不安であったが、初日から生徒が記事を貼る様子が見られ（写真6）、徐々に白紙であったボードが新聞記事で埋まっていった（写真7）。



写真6 新聞記事をボードに貼る生徒たち(左)

写真7 第1回の「新聞合戦」の結果

結果、第1回から予想を超える数の新聞記事が貼られ、回を重ねるごとにその新聞記事の量だけではなく、貼り方なども工夫されている様子が見

られた（写真8、9）。



写真8 第4回の「新聞合戦」の結果（左）

写真9 第7回の「新聞合戦」の結果（右）

3か月間の「新聞合戦」では、生徒は活動の参加者としての自覚を持ち、興味・関心を高めながら新聞に関わることができたと考える。その要因は生徒たちによる新聞活用の斬新なアイデアと積極的な運営によるものであるが、今回の活動を通じて、新聞活用の対象者ではなく当事者として生徒自身が主体的に関わる仕組みは生徒の学習効果として、非常に有効であると感じた。みらいアイデア会議の生徒たちは、この後「新聞合戦」で培った実践力を基に、第1学年全体のレクリエーションの企画・運営まで行っている。資料10は、「新聞合戦」を提案した生徒たちの感想であるが、この記述からも生徒の達成感だけでなく、自己肯定感の高まりも成果として見られた。

資料10 みらいアイデア会議の生徒の感想

- ・みんなが楽しく新聞に興味をもってくれてよかった。
- ・実際にやってみると、改善点や課題が多く見えた。
- ・3か月やりきって、私自身も自分に少し自信がもてた。

(3) 実践3 新聞探究ポケットノートの開発

4月から12月までの実践において、総合的な探究の時間の活動および生徒提案の「新聞合戦」を実践し、生徒が新聞を実際に手にとる機会を増やすことができたと考える。その上で本年度の最後の取り組みとして、新聞探究ポケットノート「A log」（写真10）を開発し、第1学年の生徒全員に配布した。このノートは「もしもポケットに自分だけの新聞が入れば」というコンセプトの下、生徒が更に自分自身に新聞を近づけるきっかけになるように実践した。



写真10 新聞探究ポケットノート（A log）

このノートの特徴の1つは、ポケットに収まるサイズ感である。冊子の形になっているが、元はA4の1枚に切れ目を入れて折り込み作成する仕様になっている。写真11のように、生徒に配布した際には楽しみながら各自で作成している様子が見られた。

もう1つの特徴は、ノートの使用方法である。生徒はまず自分が探究したいテーマを設定し、関連する新聞記事を紙面の新聞やデータベースを活用して探す。この点に関しては、「新聞合戦」の仕組みと同様であり、生徒は活動しやすい仕様になっている。ノートには5つの新聞記事を集められるようになっており、生徒は新聞記事の「見出し」「新聞社名」「掲載日」「概要・感想」をそれぞれのページに記入する。写真12は「地域振興」をテーマとして活動している生徒のノートであるが、自分の身近な地域における高校生の活動を取り上げている。



写真11 ポケットノートを作成する生徒の様子（左）

写真12 ポケットノートの生徒の記述（右）

またこのノートを広げると、裏面に新聞記事が貼れるようになっている。テーマに関連する記事を検索するだけでなく記事を収集でき、自分だけの新聞ノートを作成できる。一方で、データベースで新聞記事を検索した生徒は紙面の新聞記事が手元にない状態になることが考えられた。その問題を解消するために、紙面の記事を希望する生徒用に、ポスト（LogPost）を設置した（写真

13)。紙面の記事が欲しい生徒がノートにポストに入れ、教員が受け取り、新聞記事を印刷してノートに添付して返却した(写真14)。生徒の中には、「宇宙開発」をテーマに1970年代の新聞記事の取得を希望した生徒も見られた。紙面とデータのハイブリッドによる実践を通して、生徒は過去と現在の出来事について新聞を媒介としてつなげ、未来への志向を高めていく学習効果が一部で見られた。



写真13 紙面の記事を希望する生徒用ポスト(左)

写真14 記事を添付したノートの返却(右)

1か月間、新聞探究ポケットノートを実践し、生徒たちは「ひらく」仕掛けを楽しんでノートを作成し、興味を持って取り組む様子が見られた。またノートを受け取る教員は、生徒の設定したテーマ等から、今現在どのようなことに関心があるのかを個別に知る機会となった。

5. 成果と課題

1年間を通じて3つの実践に取り組み、生徒が新聞を自ら手にとる機会をつくるという目的について、多くの機会で達成できたのではないかと考える。また生徒は一連の新聞を活用した活動を通じて、他者と関わり、社会とつながり、自分を知る様子が振り返りからも見られた。この他者や社会とのつながりの構築は、本校生徒の目指すべき姿でもある自発性や積極性の育成にも強く関係していると捉えられる。

生徒自らが学びの意味を見いだす先には、社会の中に立つ将来の自己の姿が見えることが重要である。そのためには、自己と社会との関わりやつながり、社会の中で現在生きる学びを実感し体験することが必要である。今回の実践を通して、自分と社会の入り口の扉として新聞を活用することは有効な方法であるとあらためて実感した。

一方で課題として2つの点が挙げられる。1つは、「実践の広がり」である。今回は学校内の1

つの学年で実践されたが、学校全体の取り組みとして今後展開していくことが必要である。そのためには、学校内においてNIEを推進する体制の構築や、教員間の協働体制、教員研修等へのNIEの導入が考えられる。担当者に限らず、学校としてNIEの仕組みづくりが今後の大きな課題である。

もう1つは、生徒の「新聞を読む習慣の確立」である。この点に関しては、今回の実践においても目的として掲げているが、生徒に対して2月に4月と同様の新聞に関するアンケートを実施した。資料11は新聞閲覧に関する項目における4月と2月の結果である。2月の結果を見ると、新聞を1週間で全く読まない生徒が58%であり、4月の結果と比較すると約3%減少している。また週に4~5日読むという生徒は、4月の1.5%から3.6%に増加している。このような結果から、数パーセントの変化ではあるが、新聞を読む生徒の数が増加していく前向きな変化が読み取れる。しかし依然として、約6割程度の生徒が日常的に新聞を読む習慣が身につけていないことが明らかとなった。今後においても、新聞を生徒自らが手にとり活用し、日常的に新聞を読む習慣を身に付け、新聞を通じて多様な学力を養うことを目的とした実践と挑戦を目指していく。

資料11 新聞閲覧の頻度

1週間の中でどのくらい新聞(紙もしくは電子版)を読みますか。	4月 %	2月 %
全く読まない	61.4	58.0
週に1日以下	25.8	29.0
週に2~3日	8.3	7.3
週に4~5日	1.5	3.6
毎日	3.0	2.2

NIEの活用による思考力・判断力・表現力の向上

静岡県立藤枝東高等学校 深澤 拓・矢代 哲子

1. はじめに

(1) 学校紹介

静岡県立藤枝東高等学校は、全日制普通科の各学年7クラスの学校である。令和5年度には新校舎が完成し、6年度に100周年を迎える。イノベーションハイスクール実践校に指定されており、文理融合型の教育を目指している。多くの生徒が四年制大学の進学を希望している。



(2) NIE実践の目標設定

学習指導要領の改訂により、生徒が新しい社会を生き抜くために育むべき学力の3つの要素が設定された。それに伴い大学入学共通テストや各大学独自の問題に、知識だけでなく、3つの要素の1つである「思考力・判断力・表現力」が必要な問題が増えてきている。そこで、新聞というツールを有効に使うことで生徒の「思考力・判断力・表現力」の向上につながる取り組みを行えないかと考え、上記の目標を設定した。

2. 実践内容

(1) 学校全体…新聞コーナーの設置

新聞コーナーはNIE実践校への指定前から図書室に設置してあり、朝日・静岡・毎日・読売新聞の4紙を毎日配架している。

加えて、昨年度・今年度はNIE実践校として、7社の新聞を1棟と2棟を繋ぐ渡り廊下に配架し

た。1社に関しては英字新聞にすることで英語の授業などで使用できるようにした。新聞は1週間たったら渡り廊下の近くにある進路閲覧室に移し、授業で配布できる分を確保した。事前に各クラスへ告知したり、教員に周知を図ったが、課題として読みに来る生徒以外は自発的に読みに来る生徒は少なかった。他に配架場所の選択肢はなかったが、渡り廊下は長い時間過ごすには良い環境とは言えなかった。



(2) 図書館

前述の通り、NIE実践が始まる前から新聞の配架をしていたが、それに加えて新聞を利用した図書紹介のポップを図書委員を中心に作成してくれた。図書委員が新聞を読み、図書の紹介に使えるような内容の記事を探したり、時事的な事柄から紹介する本を探したりと両面からのアプローチで図書と新聞を結び付けることができた。



(3) クラス運営

日直の日誌に新聞の内容要約と感想を書く欄を作成し、日直の役割の一つとして自宅ですべての新聞や学校の新聞を使って感想などを書かせた。この日直日誌のフォーマットを他のクラスの担任にも配布し、数クラスが利用してくれた。NIE

担当が担任をしていたクラスでは、1回目はスポーツ・芸能分野を除く興味のある記事を取り上げ、2回目は自分の進学したい学部に関係のある記事を取り上げ、帰りのホームルームで発表させるようにした。将来的に研究したい学問の最新事情や現代の経済の状況、新型コロナウイルスの状況など多岐にわたった記事を最低でも1人2回以上は読むことができて良かった。感想に関しても想定よりも深く考えて書いてあるものも多く、生徒の積極的に学ぶ姿勢が見られた。また、進路指導の一環としても自分の専攻する学問を選択する一助になったように感じる。

しかし、割合的には1～3面の記事が圧倒的に多く、地域欄などまで見ている生徒が少なかったのが課題である。時事問題はもちろんだが、特集記事は新聞の魅力であると思うので、多くの紙面に目を通す工夫が必要だと感じた。

興味を持った新聞記事(総合・政治・国際・経済・社会・文化・教育・科学・地域・特集) 「中日新聞」11月1日(月)「3.面」『推計投票率 56.98%』 内容要約(5W1Hに注意) 衆議院小選挙区の投票率の推計が55.78% であり、開票後3番目の値となった。静岡県は54.70%(全国とり 低い。期日前投票は新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための 積極的と呼びかけで、過去二番目の人数となった。 感想 来年から投票する立場になる自分たちには無視できない話題だ と思った。特に若者の投票率の低さは年々問題になっているので、 高校からニュースや新聞等で政治の動きや状況を確認するとい う一人一人の意識が大切だと感じた。若者こそ投票に行く
--

(4) 面接対策(切り抜きリレー)

本校には、医学部医学科や看護学科、教育学部などを目指しているものも多くおり、大学入試で面接が課されることが多い。特に大学入試での面接は専攻する学問の正確な最新の知識が必要とされるので、2年生のうちから新聞を使って授業では習わないような知識の習得やアウトプットの能力向上を目指した。特進クラスの生徒を中心に希望者を集めて、記事を切り抜き、その記事の感想と前の人が選んだ記事の感想を書き、次の人に回す、新聞記事の切り抜きリレーを行った。

進路意識の高まりや、普通の学校の授業では触れることが少ない分野を学ぶことができた。課題としては、コロナ禍ということもあり、新型コロナウイルスに関する記事が多くを占めた。しかし、新型コロナウイルスがなければ、医学に関する詳

細な記事がコンスタントに掲載されることもあまりないので、良かった点でもある。

担当者感想

献血で製造された血液は、新型コロナウイルスが伝染しているため、その血液を
 輸血する男性は、新型コロナウイルスに感染してしまつて。通常、献血者の血液に
 異常がないと検査する。しかし、ウイルスの量が少なすぎたため検査をすり抜
 けた可能性もある。今回のようなことを防ぐために、献血者が献血する
 前、献血する前の献血が感染症の検査と行なう必要がある。今回の
 輸血した血液は、検査結果をしっかりと見てほしい。また、コロナ禍で献血不足
 が深刻化している。献血は、私たち高知生でもできる。献血が、献血
 にも献血したいと思う。自分たちが献血したことで、誰かが助けられる
 ところがある。献血は、コロナ禍で人の命を助けることができる。今
 度も献血を通じて、助け合う心を大切にすることが大切だ。

他の人の感想(感想の後に名前を書く)

献血者の男性は、誰かの力になりたいと思つて、自分
 たちのために、このような結果を出して、自分たちの
 思い、助け合いの心を大切にすることが大切だ。

コロナ関連のいい記事を選んでくれて、よかったです。こういう事例
 があると、様々な所に影響が出るし、印象も変わるし、いいですね。
 安全、安心で確保する体制が、いかに大事ですね。

(5) 授業(日本史)

読売新聞の夕刊で毎週(現在は世界史と隔週)掲載されている「日本史アップデート」という日本史の以前の教科書に載っていたような通説を覆す最新研究をまとめた特集記事を利用して授業を行った。日本史の比較的新しい研究内容を学ぶ機会を作るとともに、内容把握・要約する力を身につけることを目指した。見出しと内容要約(100字)を書き、他の生徒とシェアし、答え(実際の記事のまとめ部分)を見て、他の生徒と文章を評価し合った。近年の大学入試共通テストでは史料によって、最新の研究の内容を考察させる問題が増えており、日本史に限らず大学独自の2次試験の対策になった。また、新聞の半面を使って書かれている記事を深く読み込むことを複数回行うことで、思考力などの向上につながったように感じた。特に多くの生徒が大学に進学する本校では、大学での学び・研究の方策を先行して経験することができて良かった。

また、葛飾北斎の版木の発見や富雄丸山古墳における盾形銅鏡や鉄剣の発見など、最新の日本史・世界史に関する発見なども授業の冒頭の時間を

知恵を絞って考えた方法を紹介しながら自分に合う対処方法を選ばせていきたい」という感想をいただいた。



(2) 課題

新聞を身近に感じて欲しかったので、配架場所や広報などを工夫したが、こちらで新聞を読む機会を与えないと、自主的に読むことは少ない。また、読む機会を与えても、総合面を読む生徒が多く、地域面や特集記事などにも目を向けるような工夫が必要だと感じた。

教材として使う場合、40名のクラス分を用意・配布することはNIE実践校から外れた場合、かなり難しく、配布にも時間がかかり、紙面も古いものとなってしまふ。また、他紙との比較に関しても、グループを作っても大量の新聞が必要になるため、こちらである程度紙面を限定して用意するしかなく、教員の負担が増えて運用のハードルが上がる。難しい問題だとは思いますが、どの学校もGIGAスクール構想で生徒一人一人がタブレット端末を持つようになるので、これを活用して記事の検索だけでなく紙面が少しでも見られるようになると、教育の現場で新聞を使うハードル、及び生徒の新聞を読むハードルは大きく下がり、生徒の成長や新聞を読む人の増加につながるのではないかと感じた。

3. 成果と課題

(1) 成果・評価

実践を通して、生徒以上に教員が新聞を教材として使う有効性に気付くことができた。大学への進学のために、授業の進度や内容を重要視する高校の気風はあるが、新聞を読み、新たな知識を得て、そこから考えられることを挙げたり、他の生徒と共有したりすることで思考力・判断力・表現力の向上に寄与することができた。またそれだけでなく、高校の授業以上のより深い知識や学び、大学入試の対策、大学入学後の学問の研究にも大きな力となり、進路指導にもつなげることができた。授業の時間が足りないという教員も多いが、生徒の力となる事が実感として分かれば、取り入れる教員も増えてくると思う。

生徒に課題として新聞を読むことを課しても、記事の見出しだけを見たり、1面を表面的に読んだりするだけで提出してしまう生徒が多いことも想定としてあったが、特に自分の専攻に関わる記事に関しては、細かく読んで深く考察している生徒も多くみられた。

また、NIEの担当の2人の教員以外にも新聞を活用した活動を積極的に行ってくれた点も良かった。

静岡県N I E 推進協議会 実践指定校一覧

- 2000年度 熱海高、磐田・城山中、静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小
- 2001年度 静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小、長泉高、小山・北郷中、浅羽中
- 2002年度 長泉高、小山・北郷中、浅羽中、静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小
- 2003年度 静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小、天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中
- 2004年度 天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中、沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小
- 2005年度 沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小、湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小
- 2006年度 湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小、清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小
- 2007年度 清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小
- 2008年度 東海大付属翔洋高、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小
- 2009年度 浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小
- 2010年度 御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小
- 2011年度 浜松江之島高、浜松学芸中・高、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、磐田・神明中
- 2012年度 常葉学園中・高、島田・金谷中、磐田・神明中、静岡・東源台小、浜松・有玉小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小

2013年度	富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小、金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、島田高、常葉学園中・高、島田・金谷中、静岡・東源台小、浜松・有玉小
2014年度	金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、浜松・有玉小
2015年度	裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、東海大付属小、金谷高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中
2016年度	駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、富士・田子浦小、東海大静岡翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小
2017年度	東海大付属翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小、遠江総合高、静岡・観山中、本川根中、富士宮・西富士中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校
2018年度	三島南高、静岡聖光学院中・高、富士宮・上井出小、静岡・井宮小、遠江総合高、富士宮・西富士中、静岡・観山中、本川根中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小
2019年度	富士宮・西富士中、本川根中、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小、浜松西高、常葉大附属橘高、小山中、伊豆の国・韮山南小、吉田・自彊小、湖西・白須賀小、浜松・城北小
2020年度	西伊豆・田子小、伊豆の国・韮山南小、静岡・清水飯田小、吉田・自彊小、浜松・城北小、湖西・白須賀小、三島・南中、小山中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水西高、常葉大学附属橘高、浜松西高、清水特別支援学校
2021年度	浜松・城北小、小山中、三島・南中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水特別支援学校、河津・南小、静岡・中島小、牧之原・萩間小、浜松・上島小、静岡大成中・高、浜松学芸中・高、御殿場南高、藤枝東高
2022年度	河津・南小、静岡・中島小、牧之原・萩間小、浜松・上島小、静岡大成中・高、浜松学芸中・高、御殿場南高、藤枝東高、伊豆・土肥小中、富士見中、静岡・清水飯田中、藤枝・広幡中、浜松・春野中、静岡北特別支援学校南の丘分校

静岡県N I E推進協議会

〒422-8033

静岡市駿河区登呂3丁目1番1号

(静岡新聞社内)

TEL 054-284-9152

FAX 054-284-9362